

み  
の  
ぶ  
道

(昭  
和  
町)

## 発刊にあたって

二十一世紀まであと十年余、この世紀の変わり目に向って社会は大きな転換期を迎えております。

特に予想される高齢化社会、人生八十年代をいきいきと暮していくため、これからの長寿社会に向けて積極的に取り組む必要があると思います。

その一つに県で昭和五十六年度から発足した、ことぶきマスター制度があります。今回の「道」の発刊にあたっては昭和町ことぶきマスター協議会教養部の会員である野沢敬太郎氏、井口 傳氏が中心となり、部の事業として昭和町にかゝる道の遺跡探究に努力されこの様に立派な図書として発刊する事が出来ました事を心より喜ぶと共に、今日までご尽力いただいた御兩人をはじめ多くの協力された方々に敬意と感謝を申し上げます。

都市化の変ぼう著しい本町にあって、この貴重な資料が郷土にのこる史跡の研究の一助となる事を念願し、ご挨拶とします。

昭和六十三年 八月

昭和町長

泉

幸 弘

	一四	大嶽山の石塔	17
	一五	義清神社の道標	18
	一六	楠さん	19
	一七	棚	20
	一八	秋葉講の燈籠	21
	一九	愛染明王の石塔	21
	二〇	五本杉	22
	二一	弥太やんの恋	23
	二二	へ押原分√みのぶ道の経路と現況	25
	二三	失なわれた風景	26
	二四	押越地内	29
	二五	中島地内	32
	二六	へ常永地区√上河東みのぶ道	33
	二七	常永寺	36
	二八	妙福寺鰐口と源加豪族	37
	二九	熊野神社	38
編集後記			39

# 一、道

人類は道を作る。それは人類が文化生活をするための必然的要請からであった。道のあるところ、そこには必ず文化が芽生える。人類は更に新しい道を作る。そこにはまた新しい文化が創造される。こうして人類と道とが依存関係のもとに発展してきたのが人類の歴史である。

人類はシルクロードを作った。この道は中国の長安または洛陽に端を発し、タリム盆地を經由して地中海沿岸に達するものである。「絹の道」と呼ばれ、紀元前二世紀末から開かれ、延々数百キロを人間の足と駱駝との背で東西文化の交流、東西物資の交易に役立ってきたのである。

メソポタミア平原に世界文化が発祥したのであるが、それもそこが東西交通の接点であったからである。近くは山梨県の長田円右衛門が主導して「御岳新道」を開発したから、あの素晴らしい昇仙峡の景観が人類の前に展開されたのである。

又、人類は道を旅することによって、その地の文化を吸収し、見聞を広め、思索を深めて成長していくのであるから、道は「文化の母」といわねばならない。

このように、道と人類文化は相互にかかわりあってきたのであるが、我が「みのぶ道」を考えると、太古より河内路として繁栄してきた

道で、国中と駿河を結ぶ「塩の道」であり、「棒道」であり、「物資交易の道」でもあり貴重な存在であった。

然るに、近時の道路開発のために発展的解消を続け、今や外形的には殆ど姿がなくなり、その一部を残すのみの現状になってしまった。今にしてみのぶ道の意義を書き残しておかないと、一切忘却の彼方に押し流されてしまう憂いがないわけではない。そこで昭和町ことぶきマスター協議会教養部がみのぶ道を取りあげ、その功績の軌跡を書き残して、これを子々孫々に伝え次代の文化興隆に資せんとするものである。

## 二、みのぶ道

江戸時代に五街道（東海道・中仙道・甲州街道・奥州街道・日光例幣使街道）が整備される以前、甲斐国と他国とを結ぶ主要な道は、甲斐九条すじと呼ばれる九つの古道であった。

1 雁坂口 国道一四〇号。別に秩父街道と呼ばれていた。

古事記に記されているように、日本武尊が東征の折、甲斐から上野（群馬県）に出て碓氷峠に至ったときの道がこれであるといわれている。

2 若彦路 日本武尊の皇子稚武彦（わかたけひこ）が現在の八代町に封を受けて、この道を通って来たといういい伝えから若彦路

と名付けられたといわれている。

3 大門嶺口 別に棒道とも呼ばれる道で、上(かみ)中(なか)下(しも)の三通りがある。それぞれ、大門峠、柏原、諏訪に出る道である。

4 右左口路 姥口(おばぐち)路ともいわれ、中道といわれたのは駿河への道の若彦路、河内路の中間にあったからだといわれている。

5 穂坂路 武田信虎、信玄と二代にわたって信濃を攻略した当時の重要な軍事道路であった。

6 鎌倉街道 現在の国道一三七号、一三八号に沿った道で、古くは黒駒路とか御坂路と呼ばれた。

源頼朝が鎌倉へ幕府を開いたころ経済文化の中心は当然鎌倉に集中し、当時もつとにぎわった道である。

7 萩原口 中里介山の長編小説「大菩薩峠」で有名な峠を越えて青梅市へ出るいわゆる青梅街道である。

8 逸見路 諏訪口ともいわれ、武田時代には信州への主要な軍事道路でもあった。

9 河内路 甲州から駿河への道は三条あるとされ、そのうち一番西側を通るのが河内路である。

(甲斐九条の項は、山梨県土木部道路建設課の編集による「山梨県の道路」によった。)

そこで道路の路首(元標)だが、それはその当時の政庁があったところと考えるのが妥当だと考えられる。甲斐においては国衙があった

時は国衙のあった地点、信虎の石和時代は石和、信玄の時代はつつじヶ崎つまり相川村、山梨県になってからは県庁所在地甲府であったと思われる。

みのぶ道は河内路のことであるが、山梨県教育委員会の刊行による「河内路・西郡路」の一、河内路、(一)、名称と経路の項に下記のように記されている。

河内路(かわうちじ)は、甲斐国と駿河を結ぶ三本の古道のうち最も西側に位置し、富士川沿いの険阻な道路であった。河内路と呼ばれたのはこの往還が南巨摩郡、すなわち東河内領、西河内を主として通るため、富士川兩岸に通じていたが、本稿では主要街道であった西河内領を通る道を主として記すことにする。

河内路はまた日蓮宗の総本山である身延山久遠寺の参詣路として近世に栄え、「身延道」とも呼ばれ、また近代には「駿州往還」といい、さらに、韮崎方面から中巨摩郡の西郡を南下して増穂町青柳、あるいは鵜沢町鵜沢で合流する「西郡路」とともに駿州往還ともいわれた。現在の国道五二号線のルートにほぼ一致する道筋である。

道筋の概要については『甲斐国志』(文化十一年一八八八年成立以下国志という)に次のように記されている。長文であるが引用してみよう。

○河内路 カハウチジ 古時伝通ハ府中ヨリ三里半ニシテ市川大門宿、又三里半ニシテ岩間宿、慶長以後富士川ノ通船開ケテ便道ナレバ カシカザワ 鵜沢宿通送ス自レ府四里八町、鵜沢黒沢二村夾レ川 カ 各々口留番所アリ河内領ト九筋ノ堺也以前ハ鵜沢ヨリ岩間へ継グ一里半ナリ トサカ 砥坂ニテ富士川

ヲ済ス又岩間ヨリ岩前ト云フ処ニテ漕戻シテ切石宿へ駟行セリ近  
 辺ニ二所ノ渡口アル故兩越渡ト名ク中世鑿レテ畦ヲ架シテ棧ヲ造リ  
 西島ニキリトホシヤ截岩徑ニキリトホシヤ一行旅今ハ岩間係ラズ自ニ鰍沢一直ニ切石・八日市場  
 へ伝通ス二村ハ交代ナリ上十五日切石へ二里二十六町下十五日八  
 日市場へ三里六町又鰍沢ヨリ北方於ニ青柳一今岐シテ判沢宿ニ駟行  
 ス一里西郡道ナリ府中ニ係ラズ葦崎へ通送ス判沢ヨリ鰍沢へハ一里  
 八町葦崎へ三里半古時ノ西郡路ハ小室ニ番所ノ廢迹アリ即チ河内領  
 ノ界ナリ高下村ノ仮宿ニ出デ長知沢ニ下ル北ハ最勝寺・小林ヨリ曲  
 輪田・飯野ニ係リ甘利南宮ノ前ニ出デ若尾・武田等教村歴テ円井村  
 ニテ官道ニ会ス今モ要路タリト云フ自ニ切石宿一到ニ下山宿一里  
 二十三町有ニ早河ノ渡一八日市場ヨリハ一里五丁下山宿ハ自ニ府中  
 一八里半ナリ南方身延山へ一里南部宿へ通送ス四里十五町南部宿ヨ  
 リ三里ニシテ万沢ニ到ル置クク国界番所一境川マデハ一里駿州夫原へ  
 三里駟伝ス東海道興津駅へ七里駿府へ十一里十町ナリ又同州上松  
 野へ四里八丁自ニ松野一里岩淵ニ出ル一道アリ又万沢ノ西行ト云  
 フ処ニテ富士川ヲ渡リ十島村ニ番所ヲ置ク国界ハ葛屋嶺ト呼ブ此路  
 東河内ノ通路ニテ岩間宿ヨリ此ニ至ル駿州稻子・長貫教村ヲ歴テ大  
 宮・岩本等ニ達セリ凡ソ河内領ハ鰍沢ヨリ南駿州盧原郡ノ堺ニ至リ  
 十二里余東ハ同州富士郡西ハ安部郡ニ郡ノ中間ニ介シ富士川ノ兩涯  
 ニ沿ヒ長ク延ビタル地ニテ左右ノ山頂ヲ限リ皆駿州ノ域ナリ其間ニ  
 径路数条通ゼリ三沢ニ岐路アリ市ノ瀬村ヨリ東ニ行古関村ニ口留  
 番所ヲ置キ富士郡根原村並ニ本州ノ本栖ニ出ヅ各々三里半自ニ府中  
 一至ル古関ニ九里ト云フ下部村ヨリ東シ湯奥村ノ金山嶺ヲ超ユ山

内三里余ニシテ同郡猪頭村ニ出ヅ上井出ノ西ナリ帶金ノ東一嶺ヲ超  
 エ佐野村ヨリ石神嶺ヲ超エテ稻子村ニ出ヅ右二所ニハ番所ナシ  
 西河内ニハ福土ノ徳間ト云フ処ヨリ盧原郡大平村ニ出ヅ又南部ノ  
 成島ヨリ往ク路ハ安部領アリ国界マデ三里安部梅ヶ島ニ出ヅ大城  
 村ヨリ行クハ乙女坂ヲ超エ三河内ニ出ヅ又雨畑ヨリ稻又超ト云フ処  
 ヲ過ギ同州井川ニ出ヅ長畑越ハ三河内ニ到ル以上ノ諸徑ニモ番所ナ  
 シ

甲府から鰍沢までについては、『甲斐叢記』（寛永元年―一四八  
 年成立。）に、

河内路、昔は八代、巨摩郡に亘りき。今は巨摩郡のみに属り。府  
 の隻羽口より青沼に出て、岐路あり西は甲州道中葦崎へ南に出て荒  
 川を濟り。西条、河東中島、二村を歴て布施村岐路あり左市川路よ  
 り鰍沢へ伝送を今の駅路とす。古時は布施より東花輪、大田和の三  
 村を過ぎ笛吹川を越え八代郡の上野村を過ぎ芦川を市川大門古の  
 係り此より坤位に向ひヒツジサシノカダ還せしと見えて同村の支村帯那に閑址存れり  
 印沢、高田、下大鳥居、黒沢閑あり本栖の諸村を過ぎ割石嶺を踰  
 え岩間村古の巖崎渡此に鰍沢よりを越し巨摩郡西嶋村に出て切  
 石宿に達る。

とある。

このように河内路は、古くは甲府から昭和町、田富町、三珠町、市  
 川大門町とほぼ県道甲府市川大門線に沿って、割石峠を越えて六郷町  
 に入り、六郷町楠浦で富士川を渡って中富町切石で富士川右岸へ至っ  
 たが、慶長十七年（一六一二）富士川舟運が開始されると鰍沢が舟運

の中心となって発展し河内路も鯉沢を經由するようになった。経路は田富町布施で古道と分かれて西進し、若草町・甲西町を経て増穂町青柳で西郡路（現在の国道五二号線）に合流して鯉沢に入り、ついで中富町切石で古道とあい、そのまま南下して身延町・南部町・富沢町とほぼ国道五二号線沿いに富沢町万沢で駿河国穴原となるルートである。（この項は多少省略してある部分があるので、詳しくは同書を参照されたい。）

府中より駿河湾に至るまでの経路については『身延町史』（八三三頁）に次のような記述がある。

河内筋の交通路は甲斐国府中に武田氏の館があった。それを本城として府中・市川大門町・黒沢・割石峠・岩間・切石・八日市場・下山・身延・南部・万沢・興津と記されている。

また、みのぶ道の古い記録に『昭和村誌』（八六四頁）第一節、道路の項に次の記述がある。

奈良時代から平安時代の河内路と呼ばれたものは、鎌田から稲積北部を経て布施（小井川）に至り、ここで渡し舟に依って湖河を横断して西南地域に連絡したことが想像できる。当時、布施南部には布施屋というものが置かれ、公の旅をする者に無料宿泊と施療を許したそうである。この布施屋は全国各地とも峠の入口とか渡舟場に設けられたものであることが文献によって知ることができる。而して、この場合の布施屋は渡舟場に設けられたものと推定できるので、その布施（小井川）の南部が河内路の渡舟場で、その布施に要する費用をそこにあった大安寺の寺領を以って賄い、そのために中央への貢税を免れてい

た。この故事によって布施（小井川）の地名も生じたことであろう。

大安寺の遺跡は発見することはできないが、小井川分間地図により探索すれば、現今の小井川宿の下から二町ばかり西に大安寺という字名が残っているのでそこであったと思われる、この寺が布施（無料宿泊所）の義務を負ったことも納得できる。こうしたことから当時の河内路は鎌田・稲積・布施南部をつなぐ一線によって、当時この盆地を横断したものである。

と記されている。

このように往古から栄えてきた河内路であるが、河内路が何時頃からみのぶ道と呼ばれるようになったかは不明であるが、身延山久遠寺と何か関係があるのではないかと思われるのである。身延山久遠寺が何時頃から栄えたかは望月日滋著「日蓮聖人と身延山」の書によって知ることができる。即ち同書によれば、御草庵の改修として『こうして聖人の予言通りに、他国侵逼の難が二度までも起こったことにより、一般の人々の中には聖人の説く教えに対しその正当性を認める者が次第に増えていったのである。身延山の草庵に出入りが多くなり、いかにしても手狭となったうえに、従来の庵室が老朽化したので十一月に大改築が実施されるに至ったのである。地引御書によると、坊は一〇間四面という大堂であり、十一月一月にまず小坊と馬屋が造られ、八日には大坊の柱が建ち、九日十日で屋根が造られ、そのうえ天候にも恵まれて「あたたかなること、春の終りのごとし」（昭定一八九四頁）と記されている。ここに草庵の生活から、大坊・小坊及び付属の厩まで備えた本格的寺院の構えが落成したわけである。妙法華院身延山久

遠寺はこうして初期の伽藍を見るに至ったのである。』

このように身延山が隆盛になれば参詣者も多くなるので、みのぶ道という名称はこの頃起こったものではないかと思われる。

同書はなお続けて、『弘安五年九月十三日日蓮が入滅の後、感情のもつれなどもあって、日興が身延山を離れ富士大石寺派を、日昭は鎌倉を中心に、日朗は武蔵鎌倉を合わせて、日頂は下総を中心に寺を建て門流をつくっていった。それがため一時身延山は淋しくなったのだが、日蓮宗中興の先師である「日朝上人」が寛正三年（一四六二）に十一代の法灯を継承され、文明七年（一四七五）に鷹取山の山麓で日照の悪い西谷から現在の地へと堂塔伽藍を移転して整備拡充をした。これを契機に身延町という門前町も形成された。』と記されている。この伽藍堂塔は実に壮大なものだったと思われるので、身延山の参詣人もいよいよ増加してみのぶ道の賑わいも一入のものであったと思われる。

降って徳川初期、所謂「徳川五街道」が開発され、甲州街道もできたのでみのぶ道は一層の賑わいを増していったと思われるのである。

いまはむかし 今昔、聖徳太子が十七条の憲法を制定し（六〇四年）、孝徳天皇が

初めて年号を建て大化元年（六四五）とした。追々文化も進み、文武天皇の大宝元年（七〇一）画期的な大宝律令が公布され、その中に租税法も含まれ「口分田法」といった。段毎に租稻二束二把を出さしめて地租とした。稻一束より春米五升を得る定めであった。その地租を

或いは人の肩に、或いは馬の背に負わせて国衙に納めに行くのにみのぶ道を通っていったのである。亀甲花菱文縫箔打掛を纏い、お駕に

乗ってお伴を連れた貴婦人も通っただろうし、水干を着た役人も通ったのであろう。

下って、慶長十二年（一六〇七）丁未三月、角倉了以が富士川の開鑿をしたのでみのぶ道の交通量も一段と増加し、春は道の両側に菜の花やレンゲの花が一面に咲く中を、燈心売り、油売り、又三味線を背に負い月琴を持ち鼓をかかえた旅芸人も通り、冬の雪が舞い、或いは北風のすさぶ夕笈を背負った雲水姿の俳人、日時がきめてあるので止むなく媒酌人を先頭にした花嫁行列、又泪ながらの野辺の送りの葬列も通っただろうし、夏の川辺に真菰が繁り葦の葉の間によしきりがなく日に、汗を流して甲冑に身を固めた騎馬が進軍する棒道ともなり、塩や魚を運ぶ者、日用品を商う行商人、白装束で団扇太鼓を打ち鳴らしてのお題目の行列、秋の雁が渡る夕秋風の肌寒い日、飛脚が飛脚箱を肩に走り、白線二条の帽子をかぶった甲府中学生、海老茶の袴姿の甲府高女生、さては紺がすりの着物に藁草履の小学生が家路に帰るのが通り、交通運搬の用具も人の足から馬の背となり、さらにお駕、人力車、大八車、荷馬車、牛車、一輪車、自転車、オートバイ、各種自動車、近代化された農機具へと移り変わってきたのである。

みのぶ道は一千余年の文化、経済、政治、芸術等民衆の生活の歴史を載せて歩み続けてきたのだ。現今みのぶ道は発展的に解消された昭和バイパスとなり、幅員が拡張されたところもあり昔の面影が消え失せようとしている。しかしみのぶ道の魂は今もなお生きていて、それは永遠に持続するものである。みのぶ道の魂とは新しい文化を創造することである。文化の原義は「耕す」ということである。耕して新し



いものに進展させることである。伝統の上に立ってよきものを保存し、理解し、その上に立って新時代を展望し新しい文化を創造していかなければならない。

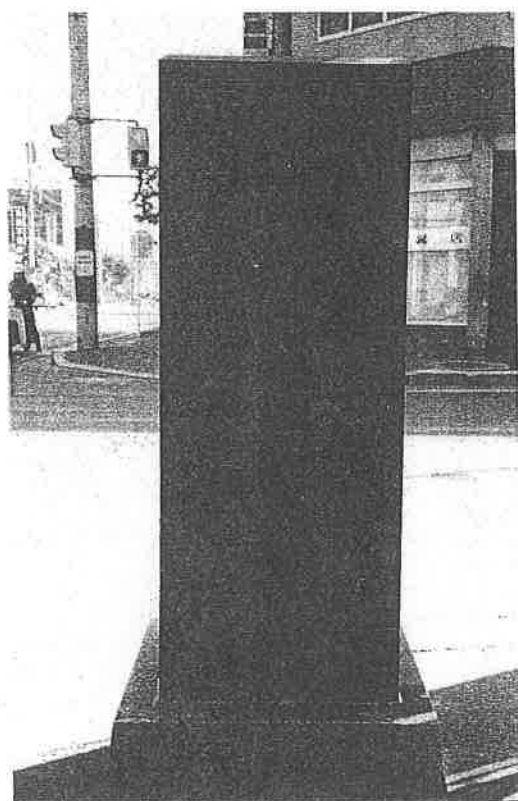
かくすることによって、みのぶ道の魂は永遠に生きていくのである。

### 三、みのぶ道 道標

甲州街道、現在の国道五二号線と河内路の交叉点の甲府市相生一丁目三番一号（元泉町二十一番地）に建てられている。南みのぶ道、西志んしう道と刻まれ、裏面に復元昭和五十年四月一日「泉町地区画整理事業完成記念」と刻まれ、側面に「此処は往昔より信濃路と河内



みのぶ道道標



みのぶ道道標側面

路との分岐点なり、古くより旅人にこれを知らせし道標ありしが、太平洋戦争末期における大空襲により消滅せり、町の歴史を語る道標の失はれたるを深く惜しみ、時あたかも泉町の地区画整理の大事業が完成せるを記念して本町民が此処に復元再建して信州往還の昔を偲ぶよすがとするものなり。泉町民一同」と書かれている。

高さは約一〇一センチメートル、石質は安山岩である。復元したのは甲府市泉町一丁目十一番地の茶商網倉本店の店主網倉誠氏が自治会長をなされていた時である。

ここは交通の要点で明治の何年頃か不明であるが、信州往還に「ガタバシヤ」という交通機関が走っていた。現在昇仙峡で観光用に使われている幌馬車で、昇仙峡のものは輪がゴムであるが、昔のガタバシヤは車輪が鉄板であったため走るとガタガタと高い音を立てたのでガタバシヤと言ったのである。ここを通っていたのは、元清水染物屋を

発着所として中巨摩の六科と小笠原へ行く二通りがあった。手を挙げ  
さえすれば何処でも馬を止めて乗せてくれたので停留所というものは  
なかった。往還の交差点ではあるし、ガタバシヤも通っていたので、  
道標の立っている付近は相当の賑わいであったことが想像される。

この道標は何万何千の通行人や旅人に道案内者として、何百年の間  
大役を果たしてきた旧道標又新しい道標に対して、ご苦労さまでした、  
ありがとうございますと感謝のまことを捧げねばならないと思う。

今この道標の前に立てば、鴨長明の「方丈記」の冒頭の文章である  
『ゆく河の流れは絶えずして、よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え  
かつ結びて』に始まり、『昔ありし家は稀なり、或いは去年焼けて今  
年作れり。或いは大家はほろびて小家となる。住む人もそれに同じ。  
所も変わらず、人も多かれど、いにしえ見し人は二三十が中にわずか  
にひとりふたりなり。朝に死に夕に生まれるならひ、ただ水の泡にぞ  
似たりける』—長明のこの感慨は平安京の三分の一を灰にした治承元  
年（一一七七）の京都の大火であった。この当時世情は騒然として、  
平家追討の鹿ヶ谷ししの陰謀が発覚し、西光は斬られ、藤原成親は備中国  
に、その子成経なりつねや平康頼やすよりや俊寛は鬼界島きかいがしまに流された年である。

甲府も昭和二十年七月六日の米軍機の大空襲によって、一部を残し  
てすべて焼野原と化してしまった。平安京の大火と同じ情景になっ  
てしまったのである。今は元の町民が戻ったり、新しく来た者も住みつ  
き様相が一変した。家屋もトタン張りの仮小屋のようなものが今はコ  
ンクリートの二階建て、三階建てとなり、往来も繁々繁栄しているの  
である。

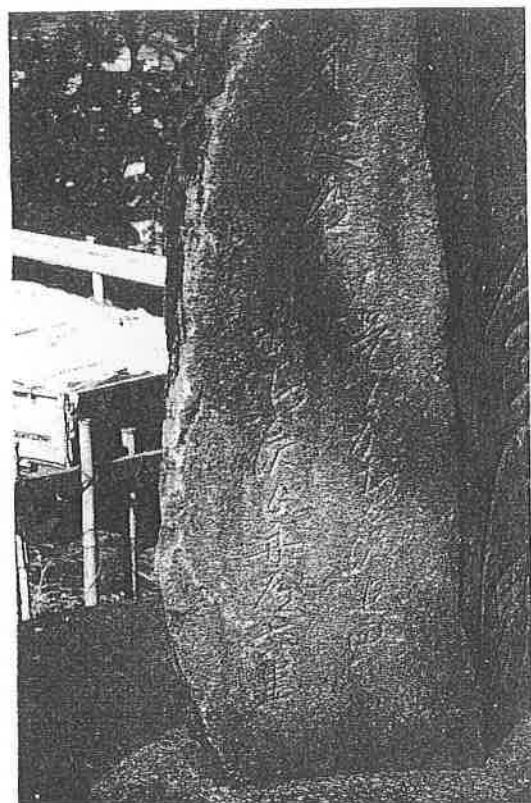
元の道標は行く方角を示すのに右・左と書いてあったが、再建され  
た現在のものは南・西と表示されている。あれを思い、これを使うと  
生々流転としていく世の有様の実像を見る思いで、深い感慨に打たれ  
るのである。

#### 四、題目碑と道標

甲府市二十人町の児童公園の横の道を隔てて南に、大きな仏塔があ  
る。この石碑は元飯豊橋北詰（現在の河西鉄工所南）のところ荒川の  
土手岸にあったものであるが、その付近の道路整備のため現在地に移  
されたものである。表面に、



題 目 碑



題目碑道標の部分

天下泰平 法

南無妙法蓮華經

国土安穩 界

と刻まれている。よく道の辻や村はずれに見られる題目碑である。

ただしこの石碑に特筆すべきことがある。それは表面斜め前に、

是よりかぢか沢まで四里

みのぶ道

かぢか沢より 舟運  
六里

と道案内が刻まれていることである。これによって、これがみのぶ道の道標を兼ねていたことがわかる。

この塔は誰が建立したか一切不明であるが、京都の人ではないかということも聞いたが根拠はない。裏面を見ると、宝暦甲戌歳八月吉日とあるから、二百三十四年前のものであることは確かである。尚施主

として、新町太田久衛門・乙黒重郎、西青沼横沢藤兵衛・横沢清右衛

門、柳町笠井三郎兵衛の五名の名が挙げられている。誰かが主唱して前記五名は拠金した人達だと思われるが、仏道宣揚のため建碑を企てたのであるが、その建碑場所を飯豊橋北詰と選定したこと、又みのぶ道の道標としたことは、当事者の「布施」の心根は何とも尊いものであると思わねばならない。尚碑の南は、前記綱倉識氏の語るところによれば現在の井上青物店のところは一面に竹藪であったとのことである。荒川は防水のために所々に竹を植えた。現在の伊勢小学校の西南部一帯は「たけのはな」といって一面に竹藪であった。そのため住む人も通る人もなくて恐いところであった。

人が通らないからその竹藪は乞食の巢になっていて、気味の悪い所であった。こんなことから荒川の昔が偲ばれる。

なおこの石碑で考えさせられることは、碑の左前に「仮真道岸恵空居士」という墓石があり、又その左に童形の墓石が一基建てられていることである。居士の墓には、寛保二壬戌年と刻まれ、そして大きい、南無妙法蓮華經の碑の裏面には建立年月が宝暦甲戌歳八月吉日と刻まれている。居士の方の寛保二壬戌歳は一七四二年で、碑の方の宝暦甲戌歳は一七五四年である。この間は十三年である。これは或いは長男が父であろうと思われる居士の十三回忌の供養に建てられたものであろうと推測されるのである。

居士の逝去年と建碑年が丁度十三年ということが単に偶然の一致だとは考えたくない。十三回忌のために建立したのだと考えるべきではないかと思われる。これをそうだとすれば、建立者は祖父の供養と

もに、みのぶ道の道標として旅人にも回向しようとする深遠な仏心によるものと考え、深い感銘を覚えると同時に、この石碑が一層の輝きを増すものと思うのである。

## 五、西条渡し

この渡しは、河内路が荒川を渡って南下する渡しで、山梨県教育委員会発刊の「河内路・西郡路」によれば、現在の飯豊橋よりやゝ下流にあたり、高畑村と上石田村境を南下し西条村（昭和町）に入る。この荒川の渡し場を「西条渡し」と記されている。なお同書によれば、相生一丁目七、八、九、十、十一、十六、十七、十八番のあたりはも



飯豊橋之碑

と高畑村地内であり、高畑から高畑に渡る渡し場が「西条渡し」とは奇異であるが、

高畑と上石田の村境を通って村落をはずれ最初の村が西条村であったためである。う、と記されている。しかし、西条村には「西条見たか江戸見たか、江戸は見た西条の宿はまだ見ない」という俚謡が残っている。その歌に西条の宿という言葉があるが、西条がみのぶ道の要所であったから西条渡しといったとも考えられる。（西条が宿場の様相をしていたことは後述する。）

### 飯豊橋

飯豊橋の南詰に「飯豊橋之碑」が建てられている。碑文は「山梨県知事 正五位勲四等 三辺長治篆額 名取忠愛撰并書ニヨルモノデ飯豊橋ハ荒川ニ架シ甲府市泉町ヨリ中巨摩郡国母村ニ通ズル古ノ西条渡ニシテ身延道中ノ要所タリ身延道ハ本州古道ノ一ニシテ永正十六年武田信虎政庁ヲ古府中ニ設ケシヨリ峡南ノ交通ハ専ラ此ノ道路ニ



飯豊橋

依レリ 然ルニ慶長年間徳川家康甲府城ヲ営ムニ及ビテ交通ノ状勢モ亦随ヒテ推移セシガ 近時甲府市ノ發展ニ伴ヒ加ヘ 明治天皇悠紀田旧蹟ニ通ズル要路トシテ漸次瀕繁ニ復スルニ至レリ 偶大正十四年八月仮橋流失シ有志深ク之レヲ憂ヒ義金ヲ募リ工費万余金ヲ投ジ十一月起工シ翌年二月竣工ス 橋長四十八間 橋幅二間 橋脚ハ鉄筋混凝土ナリ 抑々交通ノ要ハ道路ノ完備ニアリ 今ヤ新橋ヲ架シ産業ノ振興文化ノ發達ニ裨益スル所蓋シ尠カラザルベシ 茲ニ石ニ刻シ以テ後昆ニ伝フ」とある。

飯豊橋は、木造で不完全だったため幾度か洪水のため流失して、行人はその都度不便を感じていたので、永久的な橋のできることを昭和町民も強く待望していたのである。

この橋は山梨県・甲府市・国母村・貢川村の補助金と地域有志の寄付金で賄われたのであるが、碑の裏面を見ると、架橋費寄付者として百三十八名が記されている。その中、昭和町分として長谷川嘉兵衛、杉浦健造、国本社、深沢孝、内藤宇兵衛、保坂国造、深沢莊太郎の七名がその名を列ね、特別賛助員として十八名の中に深沢孝、杉浦健造の二名の名が挙げられている。この事を以ってしても、いかに飯豊橋が生活上の要所であったかが窺い知られるのである。

## 六、一 里 塚

どの街道にも里程のしるしに、一里塚、二里塚というものがあつた。昔は土を盛った塚であつたが、近世になつて、高く木材で作り一里標というようになった。河内路にも一里塚があつたようで、西条の古老は、現電々公舎の東方七十メートル位の所にあつたと言ひ残している。その古老たちも見たものでないのでどこを起点としての一里塚なのか高さはどの位のものであつたか、塚は土であつたか石であつたか言ひ残されていない。幾人もの古老が一里塚、一里塚といつていたので存在していたことは確かであろう。今は幻の一里塚といわねばならぬと思ふ。

しかも、この方面のことを西条一区の人達は「塚田」と呼んでいる。それはこの一帯が釜無川の氾濫で一面に河原になつて、大小の石がゴロゴロしていた。それを開拓するために、石を集めて塚にしてあとを耕地にしたのである。その塚は大正初期まで残つていて数十個位ではなかつたかと思ふ。それで現在でも西条一区の人達は「塚田」と呼んでいる。塚には雑草が這いかかり、蛇莓の赤い実などが混じつていた。高さは一メートル五十センチメートル位のものであつた。

西条への入口にあつて一里塚というのだから、起点はつつじヶ崎だつたらうと推測されるがこれに関する文献は何もない。

## 七、白山さん（白山神社）

みのぶ道の沿線で、現中込孝一様の宅地より北へ四十メートル位のところ、みのぶ道より五十メートル位入ったところに白山さんがあった。神社の建造物は何時の時代か壊滅して杉の大木や松の大木が残り草が茫々と繁っていた。面積は一段歩位であった。西条には若宮神社・義清神社の外に三つの神社があった。一、お伊勢さん、二、金山権現、三、白山さん、いずれも小さい神社で建造物もないので、村民相謀り廃社にしようということだが神霊はどこかへお祭りしなければ忝いとのかえで三社を若宮神社へ合祀することになった。現在合社祭として若宮神社で八月三十一日に毎年祭典を厳修している。

お伊勢さまは、西条と西条新田との村境にあったもので、現金丸富太郎氏（西条二五六四）の宅地付近にあった。金丸富太郎氏の家のことを「お伊勢宮」と現在でも言っているので神社がその辺にあったことは間違いない。今はその辺は田ぼになっている。金山権現の跡は現野沢敬太郎氏（西条四一七六）の所有地となり、農作業所が建てられ余地は野菜園になっている。白山さんの跡地は、昭和初頭頃村の青年団が開墾して、共同耕作地として桑を植えてその収益金を団の運営費に充てていた。それもしばらくで終り、耕作権が転々と移り現在は志村恂直氏が耕作している。夏は茄子などを作り、茄子が大人の背丈ほども伸びていた。その昔、社の森が繁っていたのでみのぶ道の旅人が

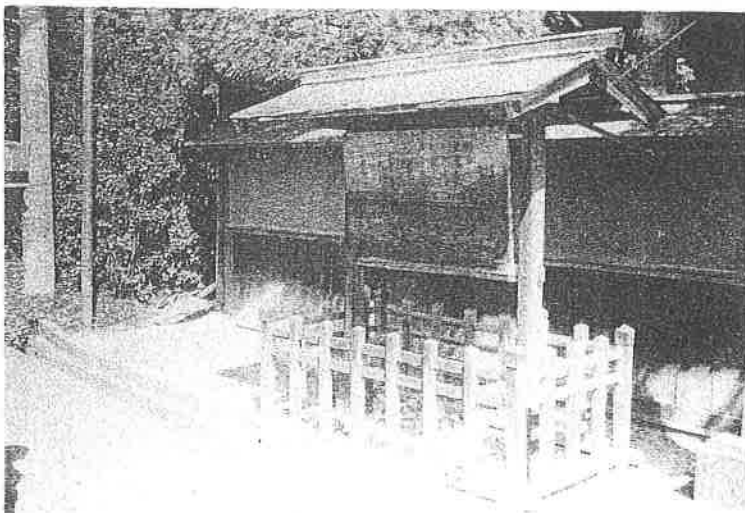
神社に参拝して木陰で一休みしたこともあったであろう。

当時の青年団長は野沢敬太郎氏で副団長は故井口孝治氏であった。人数が少なかったので一、二区合同の青年団であった。青年団の共同耕作のあとを故金丸義種氏が引き継ぎ、現在志村恂直氏の耕作と移り変わってきたものである。

## 八、ごはんぎょう

ごはんぎょうとは「御判形」と書くべきがよく判らない。

西条ではとにかくただごはんぎょうといっている。みのぶ道が西条へ入り、妙源寺の方へ行く道との交叉点に建っていた。現堀内俊郎氏（西条四二二三）の裏でやゝ広い四つ辻の中央に建てられていた。



ご は ん ぎ ょ う

高札になっていて、当時の掲示板の役割を果たしていたものである。

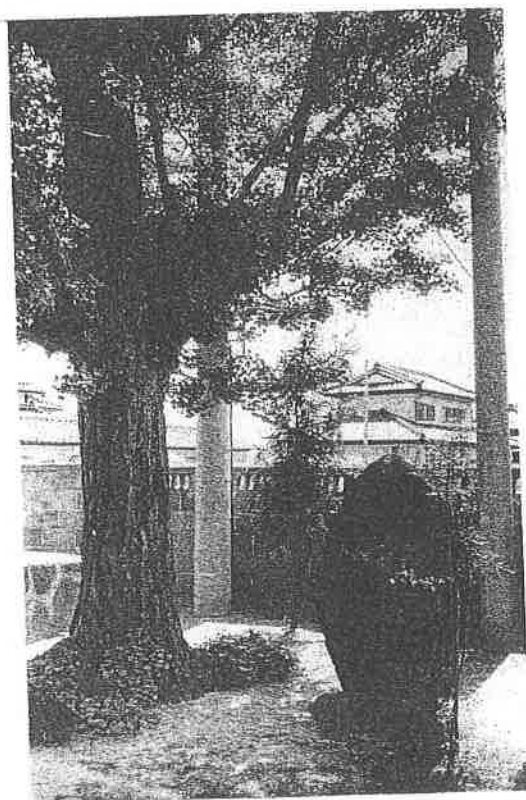
道路整備のため昭和十年頃取り毀されて今はその面影もない。

殆ど同じ形態をしているものが、北巨摩郡白州町二八八三北原兵庫氏（酒の王者七賢、山梨銘醸株式会社）の門前に現存しているので別添の写真を撮らせてもらってきた。高さも広さもすべて構造が同じようなものであるが、西条のものは外側の木の柵の下に石垣が二段積んであった。

ごはんぎょうは官府から治下の村邑に触れ（布告・布令と同じ）を伝達する場所で、官府から飛脚が飛脚箱をかついで走って来て、村の名主がそれを受け取るために出迎えた所であった。布告の文章を受け取った証文に印を押したからごはんぎょうといったのではないかと思われる。名主様はそれを書いて村民に知らせるために中央の板に貼って知らせたのである。布告でなくとも名主が住民に知らせたいことがあればこれを利用したことであろう。廃藩置県となり、印刷技術も進み布告は文書で郵送されるようになったのでごはんぎょうの役割は終わったのである。

それでも村では片付けなくてそのまま保存しておいたので子供のよい遊び場所となった。子供は柵を横へつたわったり、柵から飛び降りたり屋根へのぼったりして遊んだものである。

## 九、妙源寺案内碑



妙源寺案内碑

この石碑はみのぶ道から西条一区の北へ行く道の三叉路の入口、現在の志村恂直氏の横に建てていたものである。みのぶ道を通る旅人にこの道の北三百メートル位のところの名刹妙源寺（日蓮宗）があるという案内のために建てられたものである。道路拡幅のために現在は寺の境内に移されている。

表  
南無妙法蓮華経 日地 花押  
四十九世

浄光山妙源寺

寛政七乙卯六月

裏

檀方中

願主 仲沢利右衛門  
同人内方

世話人 河西嘉平治

十四代 玉祥院日染

元禄文化が旺盛を極め、一面人々が奢侈に流れ、人心も放恣となりなお天明の大飢饉で人々は不安の生活に陥ったので、徳川十一代將軍は松平定信に命じて寛政の大改革をなさしめたのである。所謂寛世の治である。これによって人心も安定し、経済情勢も好転してきたのでみのぶ山参詣の旅人も増加してきたのでこの案内碑を建てられたと思われるのである。

## 一〇、大場床屋

西条一区深川屋の前の道を隔て、真向こう、現キッチン・ロアのところには床屋（理髪店）があった。間口一間半奥行二間の小さい田舎床屋であった。床に板も張ってなかっただの土間であった。木製のご粗末な椅子が一つと洗面施設のほか、何の飾り物もないみすばらしい構えであった。顔を拭く手拭いが置いてないので、理髪に行くのにめいめい手拭いを持参しなければならないのであった。現在のように西洋剃刀ではなくて砥石で研ぐ日本剃刀を使っていた。東側に土間より少し高い縁側が設けてあって、お客が待ち合いに将棋をさしていた。将棋

盤も足のない板のものであった。お客が将棋に熱中してしまつて順番がきても次の人に譲るといふのんびりした風景であった。しかし、大場床屋は剃刀を研がせば名人芸を持っていた。

この床屋大場某はどこからか来た者で、姓を大場といったから大場床屋と人は呼んでいた。

妻も子もなく何の道楽もないので、大場氏は仕事が終わると甲府へ「そば」を食いに行くのが何よりの楽しみであった。当時（大正）、甲府で飲食店として有名なものが「奥村のそば」と「水吉のしる粉」と二つあった。鮎では「魚そう」が有名であった。

奥村そば店は元相生町にあつて創業二百五十年を誇る老舗であつた。大場氏はその奥村へ行つて、女中が何にしますかと聞けば、

「ざる。」とだけホツリという。

幾つにしますかと聞けば、

「もういいというまで幾つでも。」という。

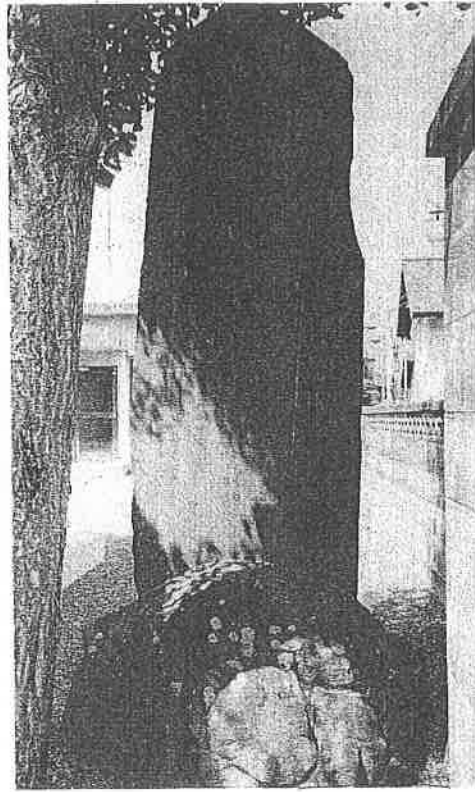
村人は大げさに、大場は「ざる」を背の丈まで食つたというほどそばが好きであつた。

大場氏のそばの食いは、茶碗から口、口から胃と一続きであつたというほどで、村人は大場はそばを食うのではなくてそばを飲むのだといった。

彼は明治・大正頃の人だったが、何時死んだか村人も知らず一代で終つてしまった。



## 二、山本先生彰徳碑



山本節之碑

### 山本君之碑

鴻屋修國漢學從小田藍洲學支那文學後入青年自由黨大唱自由民權曩為立園義塾成器舍等教授又參與甲陽日報創刊或執筆於山梨日日每日神戶又新及報知等之諸新聞後奉職於甲府商業學校十有八年懇款如慈父先生為人廉直曠澹敬神崇祖篤于交友偶罹病戊寅二月十日遂不起享年七十五人深惜焉室米子舊忍藩之出有令聞養子脩治襲其後頃日有志胥謀欲樹碑以彰其德 辱知久仍記其梗概係以銘銘曰

身延日謙印 知見卓越 典籍滿堂 辭藻宏麗 篇篇成章

豪放豁達 節高氣剛 誨人明道 德業惟昌

昭和十四年十月 從五位勲五等糸賀國次郎撰

門人 大橋昔男書

山本先生彰徳（徳をあらわす）碑

日蓮宗管長望日日謙况下篆額（高僧を呼ぶ敬称・篆書にて

書いた石碑の題字）

道添いの西条一区地内に寿楽寺という寺がある。寺の撰社金刀比羅宮のすぐ近くにこの碑は建てられている。山本家は代々同区若宮八幡社の神主で、特に第五代山本忠告先生は碩学者として名声が高く従五位下撰津守に任ぜられ、著書に「白藪伝」があり歌集なども残されている。その墓は昭和町の史蹟に指定されている。山本節先生は山本家九代高城氏の二男として出生された方です。先生の事績については碑文によってご高承ください。

山本先生彰徳碑 日蓮宗管長望日日謙况下篆額

峽 先生名節姓山本氏號峽雨元治元年十二月念八日生于西條村

雨 義清神社社司高城二男也少而学于中教院又就中桐儉吉佐野

先生名は節、姓は山本峽雨と号す。元治元年十二月念（二十）八日西条村に生まれる。義清神社社司高城の二男なり。少にして中教院に学び又中桐儉吉、佐野鴻屋に就いて国漢学を修め、小田藍洲に従いて支那文学を学び後青年自由党に入り大いに自由民権を唱へ、曩に立園義塾、成器舍等の教授と為りて又甲陽日報創刊に参与し、或いは山梨日日、毎日、神戶又新及報知等の諸新聞に執筆し、後に甲府商業学校に十有八年奉職し、懇款（ねんごろにしてまこと）慈父の如く、先生為人（生まれつき）廉直（いさぎよくまこと）曠澹（ひろくして淡泊）敬神崇祖父交友に篤し。偶、病に罹り戊寅二月十日遂に起たず。享年七

十五。人深く惜しむ。室（夫人）米子、旧忍藩（今の埼玉県行田市付近）の出で令聞（よきほまれ）有り。養子脩治其の後を襲ぐ。頃日（このごろ）有志胥い謀り碑を樹て以て其の徳を彰さんと欲す。余辱知（よくしりあいとなる）する久し。仍て、其の梗概係（あらましかかわり）を記すに銘（深く心におぼえをしるす）を以てす。

銘に曰く、

ちけんたくえつ  
知見卓越

（ちけんがすぐれている）

じそうこうれい  
辞藻広麗

（あやかる言葉が大きくうるわしい）書きものがみなあやをなす

ごうほうかつたつ  
豪放割達

（志気が大きく心が広く開ける）

かいじんめいどう  
誨人明道

（人をおしえ道をあかす）

てんせきまんどう  
典籍満堂

（書籍が家いっぱい）

へんべんせいしよう  
翩翩成章

（文章が軽やかに成る）

せつこうきこう  
節高氣剛

（みさおが高く気がつよい）

とくぎよういしろう  
德行惟昌

（よい行いがたいそうさかん）

昭和十四年十月

從五位勲五等 糸賀国次郎撰（文章をつくる。）

門人 大橋音男書（字を書く。）

碑の裏面には建碑費出資者九十名の芳名が列記され、県内村内の著名な方々が記されている。

### 三、一千部供養塔

この石塔は前記寿楽寺の境内南隈に建っているもので、表面に、

大乘 一千部供養  
妙典

右側面に、

維時 文政三庚辰載八月吉日

野呂瀬源右衛門立之

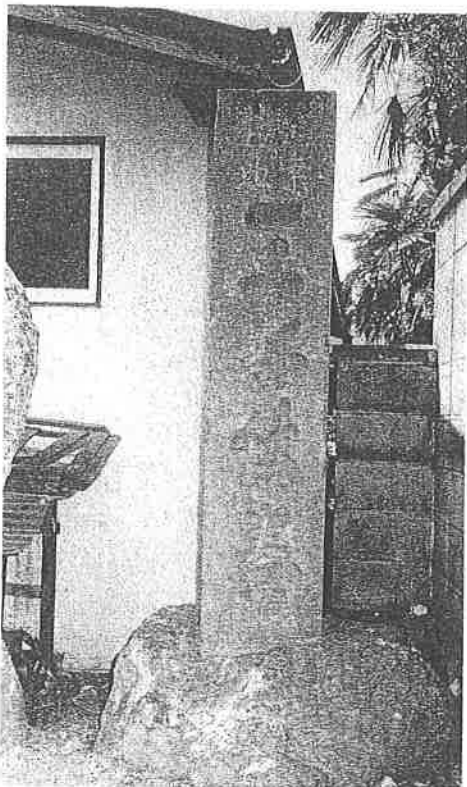
左側面に、

願主 常慶居士

と刻まれている。

その横に「供養塔誌」という石碑が建っている。供養の意義由来などが記されていることと思われるが、一部磨滅しているところがあつて読解し難い。裏面には願主と思われる方の和歌などが刻まれていて、その下部に建立の年月や氏名が刻まれていると思うがこれは全面読解ができない。

一千部供養というのは寺院に十数名の僧侶が集合して、大乘經典一



一千部供養碑

千部を読経して万霊

を供養する重要な儀

式である。大寺院で

は毎年厳修するところ

もあるが、小寺院

では多額の経費が必

要なので三年か五年

に一度、或いは十年

に一度というところ

もあるようである。

この儀式は寺にとっ

ても檀家にとっても

大事な式典であり、

一面祭典の要素も含まれている。そのため村中のお祭りでも、参詣者も

近村にまで及び何軒もの露店商が出たり、あの有名な「稚児行列」な

ども行われるのである。

一千部供養塔の建立者の野呂瀬家は、屋号を「金山<sup>かねやま</sup>」<sup>かねやま</sup>とって西条

第一の地主で、村内ばかりでなく近隣界隈から「お金山<sup>かねやま</sup>」の愛称で知

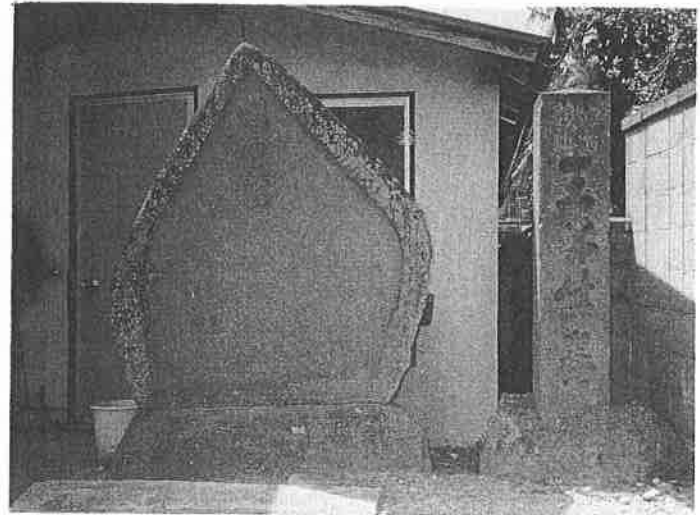
れ渡っていた。屋敷が広大で、家屋も三階建ての壮大なもので庭も池

石をしつらえて優雅なものであった。代々信仰心が篤く、源右衛門氏

は寿楽寺の筆頭総代をされていたと思われるが、文政の昔、一千部供

養をなされ塔や記念誌まで建てられたことにその信仰心の深さと儀式

の荘厳さが偲ばれるのである。



一千部供養塔

当主源平氏の祖父渉氏は義清神社七百五十年祭の際、「義清神社碑」

の建立の発起者の筆頭として奔走し、未だ中央線の開通をみない。明

治二十八年、草鞋がけで上京し、近衛篤麻呂題額、川田剛撰文、日下

部東作書を依頼し、当時超一流の大家による建碑が完成したのであ

る。

### 三、藤 棚

この店は現在の深沢淳様（西条四三二一番地）の屋敷のところにあ

ったものである。藤棚があつて、それが大きく花房も長く美しかった

ので「藤棚」と呼ばれるようになったのである。料理屋であつて女中

まで置いた当時としては立派な店舗であつた。池もあり鯉も泳ぎ、築

庭も綺麗でみのぶ道では有名なところであつた。経営主名執松右衛門

氏は西条の名主で村一番の名門であつた。屋敷が広大で北は今の農協

まで、東は故秋山富士夫様の屋敷までほぼ正方形であつた。

甲府から約四キロメートル、旅人が一休みしたいようなところにあ

つたので店も繁昌したのである。そばに雑菓子などを売る店が二軒あ

つて小さいながら「宿場」の様態をしていたので「西条の宿」と人々

は呼んでいた。酒肴の他に団子なども売っていて、求めによれば宿泊

もできたのであつた。

明治維新になり名主制度もなくなり、財産も衰微してきたので経営

難となり、全部を売り払って後裔は他のところに移り住むようになった。その土地は全部長谷川嘉兵衛氏（現長谷川明夫様先代）が買い取り桑畑にした。その中に一つ文庫蔵だけが残った。その蔵と付近の僅かばかりの土地とを三城収治氏が買って住むようになった。三城氏は秋田県士族で山梨県庁に勤務していた。退官後推されて村長までなされた方であった。未亡人はそこに住んでいたが、子供が成長して他に出てしまい、自分も亡くなり誰も居なくなったので再び長谷川嘉兵衛氏に戻った。今は蔵もなく、あと地は昭和バイパスと宅地になってしまった。

名執家の当主名執保義氏方には旺盛だった名主時代の面影を残している、かつての本屋の屋根瓦が残っているが、それによって本家がいかに壮大なものであったかが窺われる。その他、代官所から「触」を知らせる「飛脚箱」を初め、陣羽織、刀、古文書、家具、調度品等数多くのものが残されていて、往時を偲ぶすがともなるのである。

特に珍しいものとして、「男根」が残っている。往時男女の性器は神秘的なもので神格化する風習があった。各地に男女の性器を神として祭祀しているところもある。

名執家のものは男根で鉄製のものであるが、子宝に恵まれない婦女子がこれを借り受けて手でさすると子宝に恵まれるということで、その信仰によって近村から借りに来る者が多く、それは近年まで続いたということで霊験あらたかに事実子宝に恵まれた方もあったということである。

## 二四、大嶽山の石塔

寿楽川が西条前切と下切とに分かれるところが川幅が広がったのでその中央に大嶽山の石塔が建てられていた。

これは三富村上釜口の「那賀都神社」を分祀したもので大変大きいものである。

台石は石垣の正方形で、底辺一メートル八十センチ、上辺一メートル四十センチ、高さ九十五センチ、その上にまだ台石が四段あり、その上が火袋になっておりその上に笠が載っている。笠も正方形で一辺が一メートル十四センチ、全体の高さは三メートル十八センチの大きなものである。



大 嶽 山

台石の四段目の正面に「大嶽山」の字が刻まれ、三段目左側に発願人として野呂瀬源右衛門、名登利松右エ門、野呂瀬茂エ門、野呂瀬彦右エ門、野呂瀬仁右エ門、野呂瀬玄琳と当時超一流の名門六名の芳名が記されている。左側に世話人として塚原久衛門、堀内才助、深川傳二郎の三氏が記され、その一段下の右と裏に二十一名の講の芳名が記されている。

建立は元治改元甲子歳六月であるから、百二十四年前に建てられたものである。百二十四年前にあの大きいものを建てた人々の大嶽信仰の深さに敬慕の念を禁じ得ないのである。

当時の人々は信仰心が深く、お伊勢講、大嶽講、秋葉講、三峯講等各種の講をたて、お伊勢講などは、富士川を舟で下り、東海道を草鞋掛けて歩いて伊勢まで行ったものであり、三峯講などは、塩山から三富村に入り、秩父山系の山々を越えて秩父の三峯神社に参詣したのである。

講の人数は大体十名位、多くて二十名位で、毎年講中の者から二名の者が代参として神社に参詣し、御神符、お饌米、お守り、お箸等を戴いて持ち帰り、当家とって当番の家に講員全部の者が集っていて杉の葉で作った小さな飯宮に納め、その前でご神酒を戴きあとは家の中に入ってたくさんのご馳走を食べて飲を尽すのである。

那賀都神社のご祭神のお一方は大山祇命で、本社は愛媛県越智郡大三島宮浦村神山にあって、国幣大社であった。大山祇命のご神徳の一つに海上守護神がある。西条の大嶽講の方々が海上守護神であったことが脳裡にあったので、大嶽山を水難防止のため川の中に建立した事

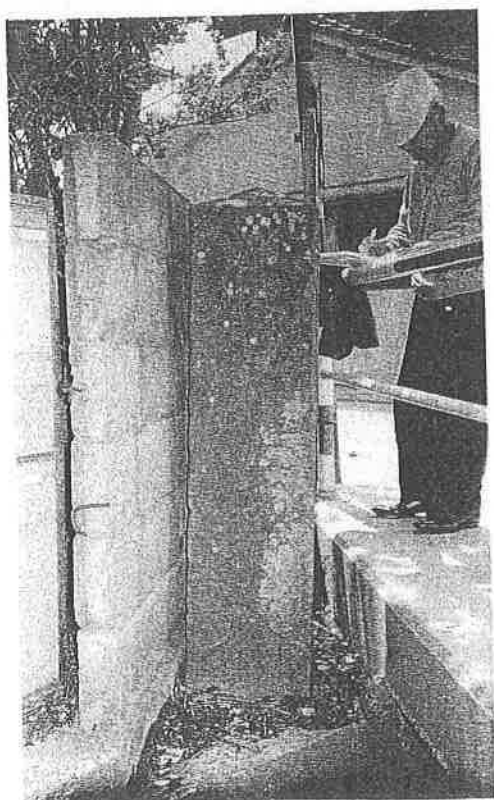
に対し深い感銘を覚えるのである。

しかも、火袋の空間は燈明が点せるようになっていて夜は燈明をつけて旅人に道案内をする標識になっていたのは、その心根の美しさに敬虔の念を抱くものである。

元の位置は道路拡幅のため鎮座することができず、長谷川明夫氏宅に入る道の左側の川沿いに移され、そこも道路拡幅のためついに現在地に移されたので、西条の大嶽山は、三ヶ所ともに水に縁のあるところで大嶽山と水との宿縁を感じるのである。

## 一五、義清神社案内碑

寿楽川が西条の前切と下切に分かれる南角（元小宮山良夫氏の屋敷



義清神社案内碑

の北隅)のところに義清神社の道標が建っている。

前面に 義清社

右側面に 甲斐源氏祖御舊跡

左側面に 従是東二丁入

と刻まれている。みのぶ道の旅人が年々増加して来たので、義清神社の参詣人も多くなり建てられたものだと思われる。

角柱の幅三十二センチメートル、高さ一メートル三十五センチの堂々たるものである。

## 一六 楠 さん

いつの頃か(江戸時代だったと想像される)、鎌田川に大木が流れ



楠 地 蔵 尊



楠 さん 原 神

て来た。大洪水のために川が増水して流れてきたものである。村人が

すくい上げてみると  
その大木はよい「香  
り」を放っていた。

村人は、これはただ  
の木ではない、ご神  
木に違いないと思っ  
た。日本民族には古

来から、山、大木、

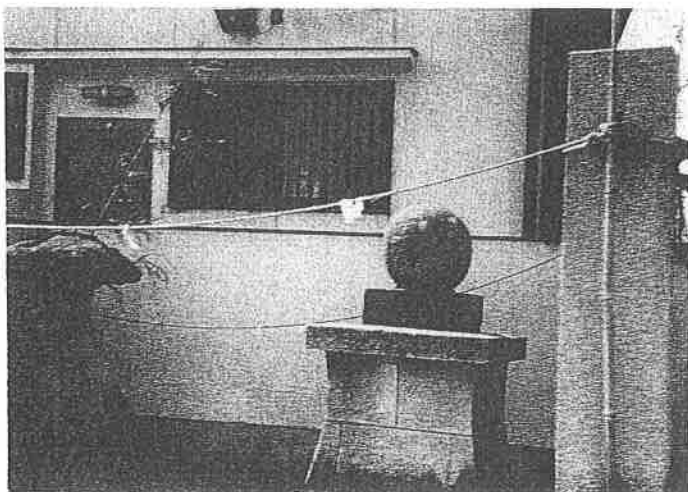
雷、水というように

摩訶不思議なものに

は神霊が宿っている

と思ひ、これらを神

として祀る原始的信



道 祖 神 西 条 下 切

仰があつた。下切の人々はこれは神木だと思い、この大木を一丈位に切断して現在地に建て神として祭り、「楠さん」と呼んで毎年八月二十三日にその祭典を挙行し、現在にまで至っている。現在は、木質であるために長い間の風雨にさらされて腐朽し、根元に木質がほんの僅か残っているに過ぎないので、「楠地蔵尊」と刻んだ燈籠を建てて大木の神の代わりをしている。鳥居の代わりに二本の石柱を建てた。傍に道祖神（球形）もあるもので、狭いながらも神域の様相を示現している。

道祖神の裏面には、

大正十五年四月

下切 中

敷地寄付 高野廣造

と刻まれている。

## 一七 棚

鎌田川橋北橋詰（若尾敏夫氏の方へ行く道の右側）にやゝ広い場所があつたので、そこに棚というものが建てられた。

二本の柱が立っていて、その柱に腕木がありその上に板を張ったものである。巾四尺、長さ一間、厚さ一寸五分位に張ったものである。運動具だが名付けようがなく棚の格好に似ているので棚と呼んだと思

われる。

高さが大人の身長よりやゝ高く、しかし飛び上がればつかまり得る高さであつた。

その板の上に乗る運動だが、足掛けで上るのも困難だし、腕立てで上るのも難儀なものであつた。人々は何とか工夫して、努力に努力を重ねてついに板に上つた。全身運動の運動具であつた。一、二、三の合図で板に飛び付き誰が一番先に板の上に乗るか競争したものである。そばに一と間の鉄棒もあつたから狭いながら村人の運動場であつた。

昔は、運動をするのに広場もないし、運動具もなかった。幸い道祖神の前にやゝ広い場所があるので、そこへ鉄棒を備え、大石を置いて「石のかつぎっこ」といって石をかつぎ鉄棒をして運動したのである。西条一区の道祖神のところに大石もあつた。重量が二十八貫あつたというから屈強の若者でないと担げなかつた。完全に担ぎ得た者は三、四名だつたということである。西条一区には、そこに土俵もあつて村の若衆や子供が相撲をとつたものである。今でも祇園の日には子供が相撲をとっている。

西条二区の道祖神の広場（今のポンプ置場）には鉄棒が高低二た間あり、大石も置いてあつた。この大石は重量が二十三貫五百匁といわれ、やっぱり担ぎ得た者は三、四名に過ぎなかつたようである。石は丸いもので手をかけるところがないので地面から肩まで上げるのは大変な力を要したのである。

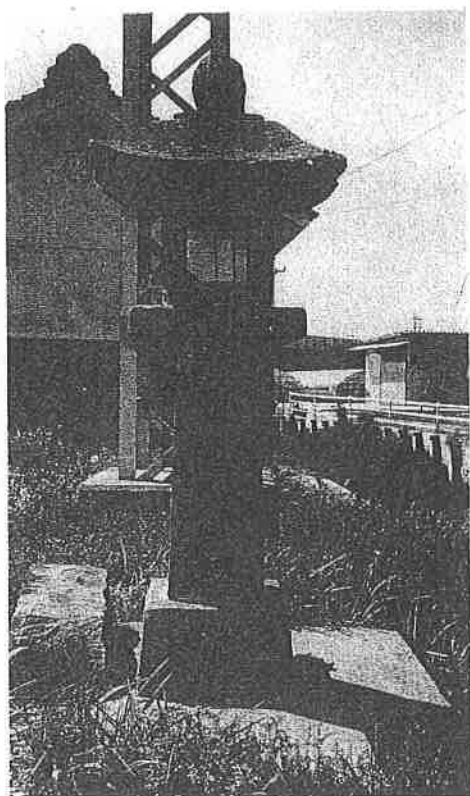
昔は運動具がなかつたので、男子は鉄棒、石かつぎ、棒押し、腕相撲、宮相撲ぐらいのものであつた。それでも頑強な体力を持ち、日清、

日露の大戦に勝てたのは、道祖神前の広場の運動が産んだ体力によるものなどといわれた。

子供や婦女子は、凧上げ、コマ廻し、メンコ、竹馬、羽根つき、おはじき、おたまなどの遊戯や運動しかなかったが、今のようには肥満児でもなく、身長や体重は劣っていても、忍耐力、持久力、根性などは昔の方が勝っていた。

## 一八、秋葉講の燈籠

西条下切の鎌田川橋の南橋詰に、秋葉さんの燈籠が建っていた。下切の秋葉講の人々が建てたものである。村人はこの燈籠を秋葉さんと呼んでいる。鎌田川の改修のため今は小宮山卓良氏の元の屋敷に移さ



秋葉さん

れている。

燈籠には何の文字も刻まれていない。ただ裏面に、昭和五十六年二月吉日再建とだけ刻まれている。小さいものなので仰々しく秋葉の字を刻むのは心苦しく思い何の字も入れずただ自分達だけで心ひそかに静岡県秋葉山上の秋葉神社を偲ぶよすがとしようと建てたものだと推測されるが、そのゆかしさが偲ばれて心うれしく思われる。

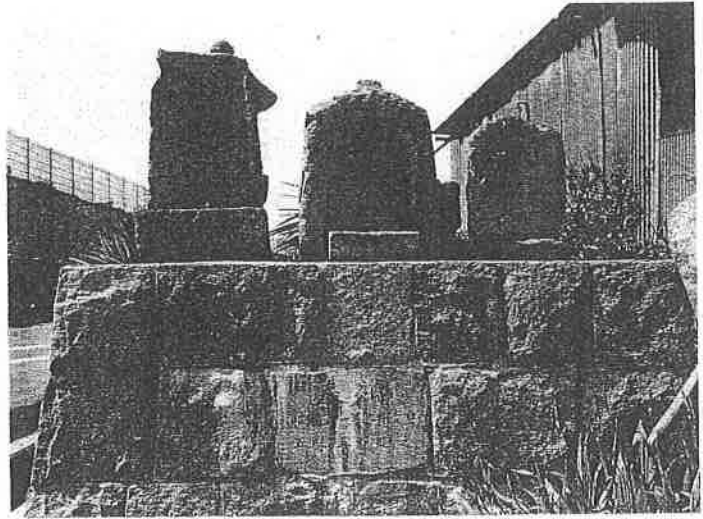
## 一九、愛染明王の石塔

現西条二区地内の中央道と昭和バイパスとの交差点より南約十メートル、旧みのぶ道の北側三メートル位のところに愛染明王の石塔が建っていた。

愛染明王は明王の名で、愛欲を神化したもので、形相は三目六臂、赤色の忿怒心を現わし、獅子冠を戴き、赤蓮華に跌座し、左右の手に、金鈴・五峰杵・金剛弓・金剛箭・蓮華等を持する。又一身に男女両面を有する形像もある。常法では無貪を以って貪を治するのである。この明王は、大貪を以って貪を治し、衆生の悪心を速滅して、無上菩提を得せしむるを主眼とするものである。

台石の上に祀られていて、台石は石垣で、低辺一メートル八十五センチ、上辺は一メートル七十五センチ、奥行一メートル五センチ、高さ八十センチである。台の上中央に愛染明王、その前に香立てがあり





愛 染 明 王

横に六地藏三基、童形の墓石二基が祀られている。この石塔は昭和バイパス開通のため現在は五味義章氏の旧屋敷跡に移されている。台石の正面に、昭和三十一年七月吉日、五味五郎建之、と刻まれている。五味五郎氏は五味本家の分家の当主である。

昭和五十六年四月吉日、五味義章氏がその石塔の横に「愛染明王」の石碑を建立した。

正面に、

右肩に一字梵字

中央に 奉納二十夜愛染明王

横に 杉山一介書

十二代 五味義章建之

と刻まれている。その裏面に由緒が彫られている。

『五味家六代甚右衛門の妻、徳岩妙香儀、文化三年甲府城より愛染明王の画像を拝受し及び江戸真福寺山王の揮毫を頂き、旧身延道

添いの西条宿場姥川地内に愛染塚を建立する以後毎年一月獅子舞八月には二十三夜の祭を厳修し通称月待の地名となる昭和五十六年昭和バイパスの工事に供へ本屋敷跡に移転し祭祀す

昭和五十六年四月吉日

と記されている。

二十三夜のお祭りの際は、家人はもとより親戚、近隣の人々も集まり、酒肴を戴いて大いに賑ったとのことである。

## 三、五本杉

「五本杉」という地名は、旧正法寺の草庵に五本杉が植えられていることに由来するのである。

当主長谷川勝氏（西条一一六四番地）の遠祖は、長谷川与兵衛（当主長谷川明夫氏の遠祖）の別家としての長谷川与平次である。長谷川勝氏宅は昭和二十七年六月失火により全焼したので何も資料がなく、先祖のことは寺の過去帳による外はない。妙源寺の過去帳によると、与兵衛第別家、長谷川与平次とあるから、長谷川家の分家であることに間違いはない。与平次が五本杉という地名に新宅を建てたので家号を五本杉というようになったのである。

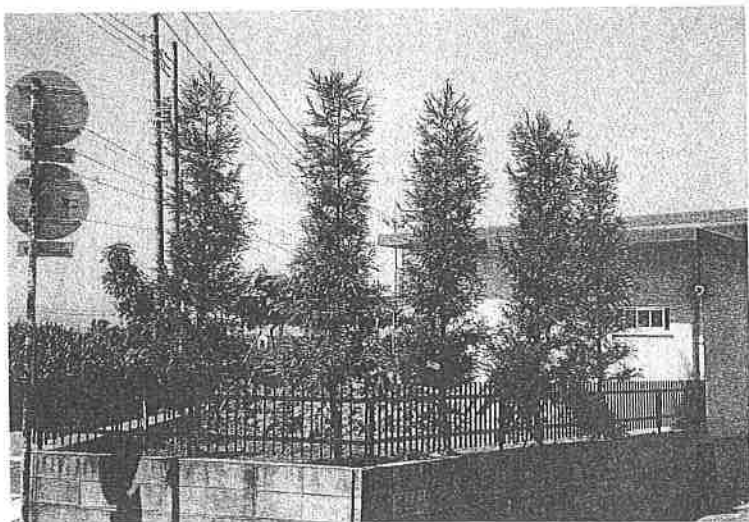
過去帳を見ると、戒名に天保の年号などがあるので相当の旧家であり、名門でもあった。みのぶ道に密着していた家で、しかも野中の一

軒家だったので道行く人々の目じるしにもなっていて、五本杉という愛称で界限の人々から親しまれていた。

雪の日など、下駄に雪が挟まって困った時には五本杉の下壁に黒板が張ってあったので、それに下駄を打ちつけて雪を払ったりしたのである。

現在、家々は明治、大正に建てられたもので、五本杉も元は螢見橋の根本にあったのが、昭和バイパスの開通によって源氏ポタル公園の隣接地に移転したのである。

現当主勝氏の五代前にも五杉という方があった。田碁の名人で、安政三年草鞋履きで上京し「三きた」の許を得たということである。その祝賀の書き物を見ると、門人百数十名の名が列挙され、発起人も当時の土地の有名な名を列ねている。この書き物だけ本家の土蔵にあったので、前記の火災の難をのがれ五本杉の唯一の遺物として残り今も横額として飾られている。



現在の五本杉

五杉は基に対する興味と自信が深く、基石が碁盤の形をした下石の上に建てられていて珍しい墓石である。

戒名も、観螢院五杉日翁信士、と刻まれている。

墓所に行ってみると、興味をそそられるのは、螢の字が戒名の二つの中にあることである。

観螢院五杉日翁信士

観量院法螢日情信士

これによって、五本杉付近に昔はいかに螢が舞っていたかがわかる。五本杉の方々がいかに螢に愛着を抱いていたかもわかるのである。

### 三、弥太やんの恋

こんな暗い晩にや風ちゃんとは化けて

くりやんのお寝間ねまへオチヨロチヨロ

弥太やんは、どこの生まれだか氏素姓もわからない若者であった。

漂然として西条へ来て、素封家長谷川嘉兵衛家（現当主長谷川明夫氏）の作男となった。当家は地主でもあり、水車業もやり、養蚕もやったので当然下男下女も置かねばならなかった。弥太やんは水車の方の臼場の作業をしていたのであった。臼場うすばの手がすいた時は、桑畑へ出て「さくり」といって桑の株間を掘って肥料の糞を入れまた土をかぶせる作業をするのであった。

今日も麦わら帽子をかぶり、法被を着、腹掛けを掛け、股引き姿で  
鎌一丁をかつき、みのぶ道を歩いて主家の（前記の藤棚のところ）桑  
畑へ通うのである。弥太やんはその農作業中、朝から晩まで「こんな  
暗い晩にや」の歌ただ一つをひっくり返しひっくり返し唄い続けるの  
であった。

当家の女中にくりやんという女がいた。年は二十でなかなかの美女  
であった。弥太やんはそのくりやんに惚れ、ひそかな恋心を抱いてい  
たのである。しかし主家の監督も厳しいし、寝所さえも、弥太やんは  
水車の方の臼場、くりやんは本家の女中部屋と遠く離しておいた。く  
りやんは弥太やんを変わり者と考えていたらしくて、てんで相手にし  
なかった。したがって弥太やんは恋情やみがたいものがあつたが、手  
の届かない高嶺の花だったのである。それに年も弥太やんは三十五、  
くりやんは二十、年令の差もあつた。だが弥太やんにしてみれば年令  
の差など問題ではなかつた。弥太やんがくりやんを思う時は、年も二  
十、初々しい純真のものであつた。だが高嶺の花だったので、何とか  
近づくのには鼠に化けるより方法はなかつたのである。思えば弥太や  
んの恋は、いかに燃えても所詮、忍ぶ恋、満たされざる恋、やるせな  
い恋であつたのである。

可愛想に弥太やんは「鼠ちゃん化け」の歌を唄うのが唯一つの慰め  
であつた。ただ唄っていれば満足であつた。

村人は弥太やんを変わり者扱いをして相手にしなかつた。親しい友  
も、ともに語られる者も誰一人なかつた。弥太やんの方も村人から超  
然としていて、何と思われようと、何と言われようと弥太やんの人生

とは無関係であつた。

同じようなことが北巨摩の武川村の「馬八節」にもあつた。馬八が  
武川村山高の豪農溝口六兵衛家の馬子として、馬を引いて葎崎へ用足  
しに行つた道すがら唄つたり、田の草などの農作業に唄つたのが馬八  
節である。

馬八や馬鹿とおしやれども（言うけれど）

馬八の歌聞やうく奴やつは なほ馬鹿

というのがある。弥太やんと同じように村人は馬八を変わり者として  
相手にしなかつた。馬八の方も、村人はみんな馬鹿ときめつけて超然  
としていた。

馬八は大詩人でもあり作曲家でもあつた。馬八節の数多い歌詞を作  
詩し、それにあの優れた作曲もしたのである。

弥太やんは作詩はしたが作曲はしなかつたのである。それで弥太や  
んは「粘土節」の曲節を使って唄つたのである。注意しなければなら  
ないことは、弥太やんは歌詞の終りに「アダダ」という雑言葉を付け  
たことである。その「アダダ」の音調が何とも言えぬ哀調をおび、幽  
玄のもので一種の諦観さえ偲ばせるものであつた。その意味で弥太や  
んも作曲家であつたともいうべきであると思う。

源重三の歌、後拾遺集所載のものに、

音もせで思いに燃ゆる螢こそ

鳴く虫よりもあわれなりけれ

というのがある。弥太やんは鳴かぬ螢であつた。そういえば、主家の  
横に清い川が流れていて初夏の夜螢が清い光を明滅させていた。

弥太やんは、あの世でもせつない恋の歌を唄っていることであろう。

宮沢賢治のあの有名な「雨ニモマケズ」「風ニモマケズ」の最後に

ミンナニ、デクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

ニクマレモセズ

サウイウモノニ

ワタクシハナリタイ

とうたわれている。これは宮沢賢治が考えた人間の理想像であるが、

弥太やんの人生はこれに一脈通ずるものがある。弥太やんよ！ あれでよかったのではないか！ 終り。

## 〈押原分〉

### 三、みのぶ道の経路と現況

みのぶ路の全体については本項で述べてあるが、ここでは昭和町地内の経路について記してみる。(地図参照)

河内路がいつ頃開かれたかは不明である。富沢町に西行坂という地名があり、また中富町八日市場大聖寺の不動明王は、古くは禁中清涼殿に安置されていたが、嘉応三年(一一七一)、禁中に出没していた<sup>ぬえ</sup>鶴を鳴弦の術をもって退治した功績により加賀美遠光が拝領し、富士川沿いに帰国途中天に現われた童子のお告げによりこの寺に安置した

と伝えるなど、平安時代から主要な路であったことを示している。

河内路の出発点は「甲斐叢記」にあるように、近世後期以後山梨郡西青沼村(甲府市)で甲州道中と岐れ、荒川を渡り、巨摩郡高畑村と上石田の村境を南に進み西条村へ行く。そのため高畑地内にあっても行く先の村名を使って「西条渡し」と呼ばれたようである。河内路というより「みのぶ路」といった方が一般に通る呼び名のこの道は、現在の昭和バイパスに併用されている清水部落の入口から、昭和町地内で起点から上石田まではかなり現在のバイパスより東へ寄りジグザグと高畑町地内で曲がりくねっていて、橋も荒川橋より下にあったようである。清水入口から甲府バイパスと交叉するDポット南及び電々公社下の川まではまた甲府市が入りこんでいる。(三百メートル)洋服のアオキの西に塚田(一里塚があった)から再び昭和町地内となるが路もバイパスと岐れて西方を並行して西条一区に入る。

昭和バイパスは直線に新設されたのに、みのぶ路の方は西条一区の高札場跡でカーブし深川商店前を一、二区下切と旧村落の中を抜け、中央道高架橋の下でバイパスと再び交叉して、バイパスは西へ曲線をかいて曲がり洩上から中島、築地方面へ行くのに対し、直線的に螢公園、小学校前、役場西を河東中島へと南下、県道甲府市川大門線(明治八年開通)を横切り、さらにJR身延線(昭和三年開通)とも交叉して南下、玉穂町の境より岐れて西へ常永駅方面に向かう。

この地点は阿原方面一キロメートル東の鎌倉街道から発した高尾街道と重なり、田富町布施の町境まで重複している。ただし、常永駅西方三百メートルほどは常永団地や住宅の増加によって消滅してしまっ

ていて跡方もなく、想定するのみとなっている。

一昨春秋、寿マスター教養部一行二十数名が参加して、県の調査委員で甲府市文化財調査員の斉藤典男先生と踏査研究したので、この「みのぶ路」発刊の大きな資料となっていることを申し添えたい。

### 三、失われた風景

なくなってしまった風景を思い出す時、少しは悪かったり嫌いなものでも、人間の懐旧の情というものはそれを美化したり惜しく思ったりする。西条から清水へかけての道の両側は、戦前俗に下肥街道などといわれた。当時、甲府市から汲んで来た糞尿を貯めておき田畑へ肥料として撒いた。その肥溜のタンクが道の両側につくられていて、いっぱい糞尿が入れてあったからである。この風景だけは今思い出しでも嘔つとする。寄生虫、地方病の病原菌を囲っておくばかりでなくやがて耕地全面に撒いていたのだ。こればかりは失われた風景であってもノスタルジアなどみじんも湧かない例である。

丁度そのあたりが現在の昭和バイパスに重なっていて、清水の町境から南へ甲府市分を含めてN T T社屋まで消えている。それから西条一区を経て二区で中央道、バイパスと交叉する以外は中島南常永駅までのみのぶ道は、舗装整備されたとはいえ往時のまま残っている。

上河東分は駅や団地のために三百メートルは道そのものさえなくな

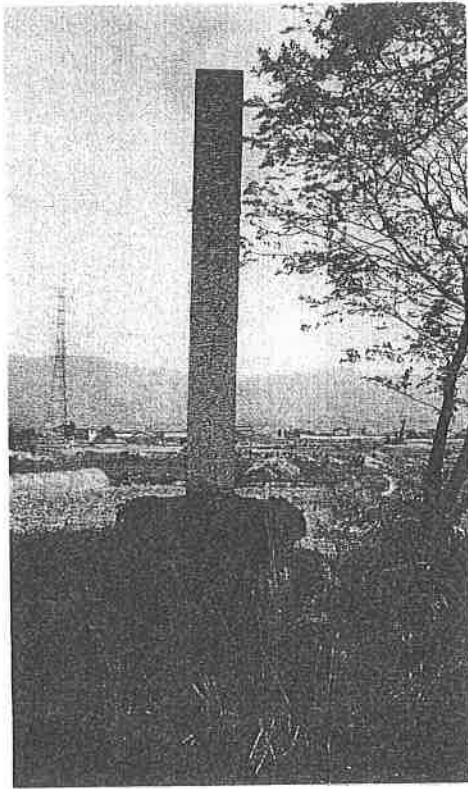
っているのだ。みのぶ路はおるか町そのものが大きく変わっているのだから何をかいわんやである。

そこで往時をふり返り、町の風景を記してみるのも一興であろう。

純農村地帯であった当時の昭和村は、米麦、養蚕、蔬菜の産地で、田畑が広々と広がり、人家はあらかたが草葺き屋根で十一の部落がその中に点在していた。商工業は数える程しかなく、竹藪を背負った家々が南向きに点在していた。野道は蛇のように曲がりくねり、畦も田畑も組み合わせパズルのように不整形だった。着物の裾をからげ、腰巻を出し、手甲脚絆で襷をかけ、藁草履か裸足、手拭いをかぶった女達の早乙女姿も今は田植機に替った。牛や馬の鼻取りをした少年、鋤や万鋤を握った男達もシャツは白く股引きやカーキ色のズボンだった。田を起こし水を張り苗を植え、秋の収穫までの田園はあまり違っていないようにだが、そこには夏の炎熱の下での田の草取りの風景はない。蛙の声もこれだけは騒音とちがって下ってほしくないのだが、何十ホーンも下った。蝗もトンボも蛭も滅った。麦秋とうたわれた大小麦の取り入れの忙しさはなくなり、稲作一毛（休耕などもある。）となり、北風に唸る桑畑や、青い海のような繁茂もない。人々は田起こしに疲れ、蚕に桑を伐り、農馬の草も刈らなければならなかった。トラクタ―が走り、コンバインが走り、ハウスや施設園芸が行われる最近の昭和町の田園風景——そして都市化の波、正に田園都市といわれているわが町はこの先どんなに変わっていくのだろうか。水も緑も空気もと——眼に見えぬ結核菌が浸していくように、これからはそれらを守る、自然や大気を守って昔の農村の状況に止めておかななくてはなるまい。

本命寺（押小裏）の銀杏の樹はどここの部落からも丸見えだった。この葉が真ッ黄になると人々はほれ今こそ麦播のしゅんだと言って稲も扱わずに麦を播いた。田圃に稲にほの点在もなくなつた。

甲府盆地を囲む山へ登ると、北でも西でも南からでも浅間寺の杉が判つて、指呼のうち昭和の部落が判断できたがその杉もなくなり、工場、屋並みが雑然とふえて目標のないジャングルとなつてゐる。



源氏ホタル発生地碑

螢合戦の話をしよう。これこそは人々が人間の生命の前に納得づくで絶滅に追い込んだのだったが、あの昆虫こそ往時の昭和の風物詩として惜しまれてならないし、泣いて殺さざるを得なかつた人々は異様な心理からふり返つてゐるのだろうと思う。そして再び螢をふる里への声も努力も試みられている。

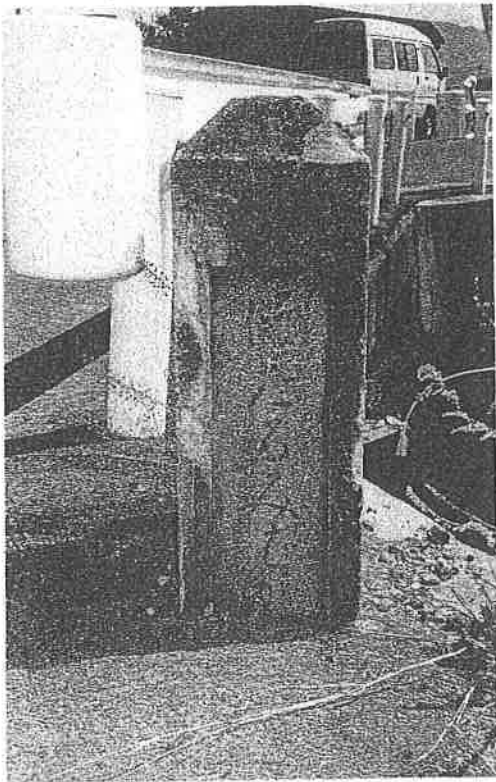
昔から蛙やトンボや蛭などと同じで、螢も六月初めになると村の田畑や川や草むらのいたる所に螢が発生して光り舞うのがあたりまえだと人々は思つてゐた。その螢が天然記念物として文部省から指定され

るようになったり、螢合戦が行われるようになったのは昭和五年前後からである。

明治維新により京都から東京へ遷都され、大正天皇が亡くなられたのは、明治天皇について東京では二人目である。明治天皇の長い在位と、維新以来の国力の内外にみる大発展と文明開化のしるしは忽ちにして天皇崩御を慕う如く代々木に明治神宮を具現し神として崇めた。大正天皇は在位も短く、病身の故もあつてか、現在東日本に一つある多摩御陵として祀られている。昭和四年、多摩御陵が完成し東都第一の御陵となつた時、時の押原連合青年団長保坂義貞氏等によつて、この多摩御陵に螢を献上し、大正天皇のみ霊を慰めようとして宮内庁の許可を得て、螢を提げて参拝し、御陵の夜に光り舞わせるべく放したのであつた。

それらもよいきっかけとなつて、翌昭和五年鎌田川の螢は天然記念物として指定をうけ、現在螢の小公園に建てられている記念碑となつた。

役場も力を入れ、青年団へ二十円の補助金を出して螢合戦はこうして始められた。西条と押越で始められ、やがて山伏川から常永駅西で今川となる中島と上河東でもやるようになった。その頃はちょうど田植え前の田に水が入り、蛙の声がやかましかった。麦も刈り入れなければならぬし、蚕も盛食期で人間は家を占領されて片隅に寝たりの農繁期で、たださえ忙しく、日の長い一日を暗いから暗いへ働かねばならぬ時季だったが、青年達はまわりの町や村の人達が大勢来てくちる事が嬉しくて、夕食が済むと鎌田川や今川へ馳けつけて、雪洞



ほたるみばし

にローソクの灯を入れ、小屋がけをした舞台で踊りや歌や手品やらを演じた。マイクロホンもなくせいぜい手廻しの蓄音機ぐらいだった。もえつきたローソクの交換にも回った。押越の県道から真菰や葦が背丈ほどもある川端の暗がり人々は螢を眺めに辿る。押越は県道わきで、西条は現在の螢見橋の所で演芸をやったのでそこが人の溜り場となった。常永は駅前の広場だった。たいてい二晩ずつ行われた。戦時の中断はあったものゝ昭和三十年過ぎまで行われたが、戦後は宮入貝撲滅のため螢が減りつづけ、螢を集めてきて沿道の川に放したりしたが、遂にやめる他なかったし、昭和五十一年指定も解除された。農繁期のたださえやせる忙しさの中で、青年は螢合戦をやり、大人達がこれに理解を示した。それらの心情をこゝで考えてみたい。まわりの町や村から大勢見に来てくれるのが嬉しくて、と先程も書いたが、全く単純に、それだけで村も青年も螢合戦に入れあげたのだ。

最近では観光行政で町の過疎化を防いだり、観光振興で町を発展させようとしている町村が多いが、そんな考えはみじんもなかった。初夏の宵を人々が螢を見てくれるだけでは地元になんのメリットがある筈もない。ただ螢を村のシンボルとしたかっただけである。螢の名所鎌田川を名所にしたかっただけだ。

山梨日日新聞社で県内鉄道沿線の車窓十景の人気投票をした時も、青年も村も挙って力を入れ、十景への入選を果たした。かくて螢合戦は村のシンボルばかりでなく、祭ともなって、人々は忙しくともその季節が近づくとウキウキと夜祭りを待つ人の心になれるのだった。

もうかる程ではなかったかと思うのだが、当時民営の身延線もバス会社も螢見物の臨時を出して人気をおおった。奉仕に働いたのは青年だけではなく、後に議長となった磯部孔一郎氏は建具職の技術を生かして雪洞づくりの労力奉仕をしたり、商店は名を入れる代わりに雪洞を寄付したりした。

宵闇のせまる頃となれば、いたる所の草むらに螢が光りはじめ、夢あかりの明滅は次第に草むらや川面の上の空にも広がり、美しい田園の詩情は夕風やむ九—十時頃がもっともたくさんの螢が舞い、光の尾を曳く。流れ星でもない、ネオンサインでもない、生きた昆虫は無限の多彩の曲線、直線を描いて、しかも長く短くと、強く弱くと光の線や尾を引く。螢にとってはお互いに求め合う交尾のための信号なのだが、それを眺める人間にとってはどんなに考えても真似のできない自然の魅力だし、今でもありく、とうかぶノスタルジアである。

昭和六年五月九日夜、押原小学校講堂で例の「鎌田小唄」の発表披

露と練習会が行われた。当時湯田女学校に勤めておられた二区の五味義尚氏の斡旋で同校の米倉寿仁氏（シュウル派の画家で、詩人でもあった）、竹田氏が作詞、作曲したものを、押原小学校に在職した斉藤先生が指揮して行われた。米倉氏達も来村され、男女青年に交じって踊り、その振り付けも作詞も作曲も高踏的で、しかも単純で情感的にもピッタリで、忽ち村民の間に新民謡、新民踊として広まり、螢合戦には演芸の中心となって行った。

鎌田ひとすじ 流れにそって

ポツと闇夜に ポツと闇夜に夢あかり

歌詞は三番までしかないが、今でもその頃歌い踊った人達が大勢いる。螢が町のシンボルとして復活したら、またこの唄も歌われ出されずにはまい。

流れ星よりも、ネオンよりもと先程ものべた。そんな美しい自然がふたたび現在の発展する町に戻ってきたら——これは螢を知る人も知らぬ人もさらにわが町のよさを思い知ることだろう。いるのが、発生するのがあたり前のわが町だったのだ。きっとそうなるだろう。いや、そうさせずにはおくれまい。そして螢が光る里は自然も水も豊かに取り戻さなければ実現しない。近代人類の指標である環境を、自然を保護する点にも一致する。

螢のことを少し長く書いた。が螢発生地の小公園付近といい、常永駅付近といいどちらもみのぶ路に沿った失われた風景である。そしてまた復活してほしい夢のイベントでもある。

## 二、押越地内

押越地内のみのおぶ路は、通称五本杉の二瀬川以南から河東中島北端の道田一番地に接するまでのおよそ七百メートルである。距離は短い源氏螢発生の地の小公園と町の中心施設である役場、小中学校、公民館、総合会館など町行政の中心機関や、郵便局、商工会館などが曲淵地域の両側に並ぶ現在のみのぶ路でもっとも重要な町の中心地であり、曲淵や曲淵庄左エ門、本命寺にまつわる伝説や文化財も数多い。

### 一、五本杉付近

五本杉という地名の由来は正法寺に由来する。正法寺は富士郡北上本門寺の末寺で、正応三年旧経塚に草庵を結んだ時本門寺の七本杉になり五本の杉を植えた。以来それが地名となったので、正しくは経塚五本杉が正しい。正法寺は天正



金 毘 羅 さ ん



六年五月大洪水のため流され、荒廢地を捨て、現在地に移された。昭和六十二年、螢發生地の小公園が造られた折、その一角に正法寺跡地の碑が建てられてある。

一、役場及び諸施設 明治二十二年町村制が施行され、旧西条村、押原村、常

永村が西条

村常永村二

ヶ村とし、

組合区域の

指定により

西条村外一

ヶ村組合役

場として押

原地区内の

曲淵に建て

られた。

(現在小学

校庭入口の

左側付近)



旧 押 原 小 学 校

それからおよそ五十年後の昭和十二年六月に、昨年取りこわされた小学校々門左の役場が建てられ、さらに昭和五十五年、現在の庁舎が建てられ現在に至っている。最初の庁舎は平屋建ての五十坪にも満たないものだった。昭和十二年の二つめの庁舎は二階建てで、明治初年

の鹿鳴館時代の様式を取り入れた当時としては豪壮な評判が高かった。取りこわされた跡

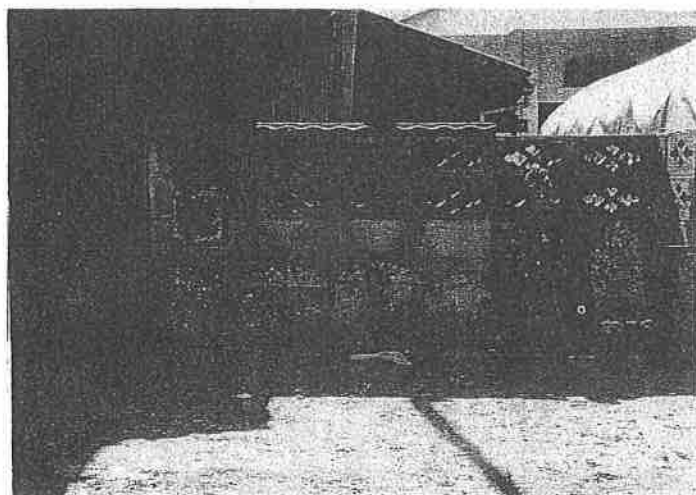
地には二基の戦争による忠魂碑が残っていたが六十二年八月に総合会館入口に移転されて

いる。駐在所も元々は最初の庁舎の右にありやがて道路の反対側の現在のポンプ舎に移ったりしたが現在はなく

なっている。現在の給食施設付近には青年学校も建てられたが、終戦とともに一時青年団など社会教育施設に改造されたりもしたし、錦町時代の県庁入口の守衛控所が払い下げられ五角堂として親しまれ青年団活動の拠点になったり、最近の昭和郵便局となったりした。

昭和四十六年秋公民館が、同六十一年総合会館が現在地に建てられたのであるが、それ以前、分けても戦前の社会教育や婦人会、青年団などの集場所は学校々舎のみに限られてい、学校が併合利用されていて独立した施設はなかった。

一、押原小・中学校 明治十七年、西条・押原・常永の三ヶ村が連合して押原尋常小学校となり、明治二十年現在の体育館南に藤村式校



庚申塔、六地藏、首なし地藏、鼻取地藏

舎が二階建てで建てられた。その後この本館を中心に一号館から四号館まで増築され、やがて本館裏に講堂が設けられ校庭も拡張されたり四号館が本命寺近くへ移動したり、さらには現在一つ残っている五号館が昭和七年に増築されたりした。

敗戦後の昭和二十三年、六・三・三制教育制度となるや、一時は講堂や廃止された青年学校で行われた中学校も、やがてみのぶ路沿いにプレハブ校舎が建ち、昭和二十四年木造二階建ての中学校々舎、同三十年特別教室なども建てられ、校庭も小・中共用の時が暫く続いた。

が、昭和四十四年小学校は鉄筋コンクリートの現在の校舎となり、中学校も現在地に昭和五十一年独立した。

### 一、曲渕及び本命寺などについて

寺などについて

渕は川の流れがえ

ぐられて深くなった

ところをいゝ、多く

の場合左右両側では

なくどちらか片側を

えぐっている。曲渕

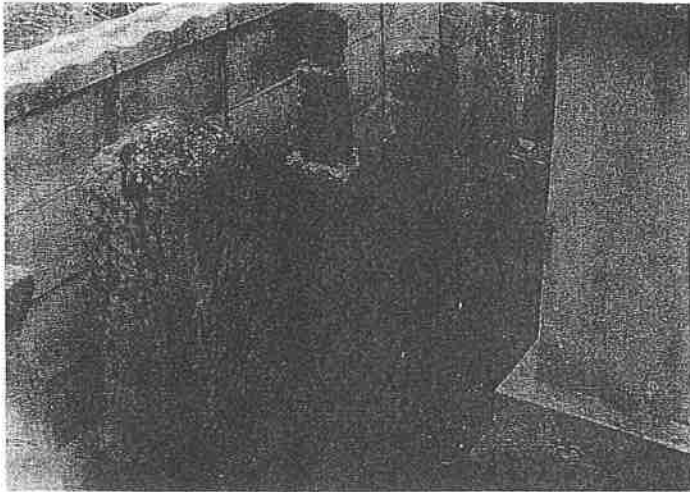
は名の示すとおり川

の曲がったところが

渕となっているのだ

から屈強の渕の条件

から生まれている。



墓の門エ左庄

おそらく大きくは鎌田川がつくったのだろう。いつの時代か判らぬが押し越すような大洪水の折につくられ、また大洪水で埋められたりもしたのだろう。そして地名だけが残った。

曲渕庄左エ門がこの地に住んでいた頃は、すでに大部分が埋まってしまつて、僅かに今の東川橋の一角が残っていてその渕に沿って屋敷もあったし、庄左エ門の墓も母の妙徳庵の墓もそこにあつたし、若宮八幡の厨子も屋内に祀られてあつた。

曲渕庄左エ門は武田の家臣で、海ノロや川中島の合戦で勇名をとどろかしたが、武田氏滅亡の後には徳川家康に仕え、甲斐の守に任ぜられ江戸奉行にもなつた。その五代目の子孫の源朝臣従五位下野守景衡が



書納奉旗二

甲府城三代目の勤番として甲府城へ来た。享保十年十月二十三日、城内の三分の一の百七十騎の行列をつくり、庄左エ門の墓参りのため曲渕を訪れた。その折邸内の若宮八幡に納めたのが庄左エ門が従軍した時の馬印の軍旗二流である。血痕が生々しくある血染め



血痕のつきたる軍旗（一部）

の旗で、明治初年本命寺へ庄左エ門とその母の墓や若宮八幡の厨子とともに移され、今日寺宝として保存されている。

旗は本麻地、巾二尺二寸、長さ八尺で若宮八幡とあり、日付、書名とも景衡が別布で書き、縫いつけてある。今から二百六十年前のこと

甲府城勤番は二人で山手勤番と下手勤番とになっていたが、景衡は山手勤番を二年つとめて江戸へ戻っている。若宮八幡の厨子は現在境内にある集会場に祀られているが、八十戸ある曲淵の人達は字の氏神として祀り、子供の誕生祝の名前が奉納されたりしている。

曲淵にはその他に大蛇退治の伝説やロマンもあるが、これは少し作意にすぎているので省く。

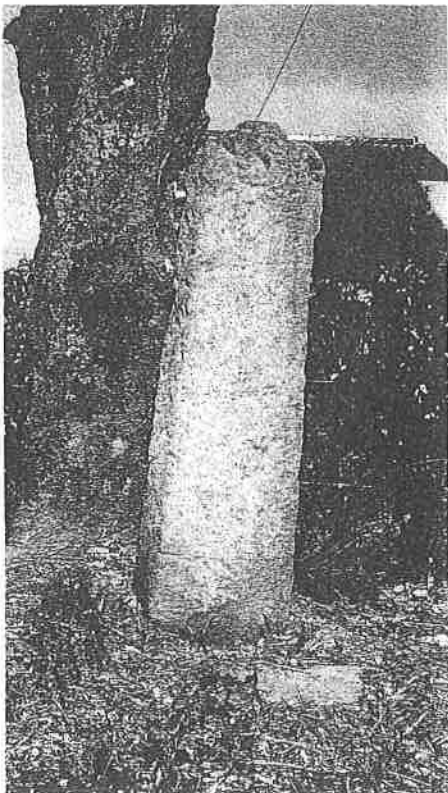
一、幻のバイパスについて 五本杉から右折して昭和バイパスは現在中島の北、築地の南の圃場を飯喰地へ走っている。しかし当初の計画は現在の役場、公民館前の体育館をぶち抜いて、中学校々舎の間を総合会館、児童館をもぶち抜いて通る筈だった。しかし時の当局のえ

い智は根強い反対を続けて、地下式案も蹴り現在地へ迂回させてしまったのである。みのぶ路と文教地区、行政の中心ともいべき押越の曲淵が車時代の騒音から免れ得、幻のバイパスとなったこの教訓はひとしく町民の忘れてはならない点だろう。

## 二五、中島地内

中島地内のみなぶ路は、道田一番地から中島の部落の両側の屋並みをはさんで南下約一キロメートル南の棹地藏のある十字路で右折、常永駅付近までの間である。

一、浅間寺 曹洞宗。本尊は十二薬師より光如来。創立は天正元年（一九七三）。寺の前の街道沿いに石造物がある。四手青面金剛像を



棹 地 蔵

刻んだ庚申塔、六地藏三基の他首なし地藏、小さい子供が馬の鼻取りをするのがかわいそうだから代わってやったという伝説をもつ石龕に入った鼻取地藏などが並んでいる。鼻取地藏は寺の西方の字花鳥の野中の道ばたにあったのだが、圃場整備の時移されてきたものである。また口唼か虫歯の病がもとで亡くなったのを祀ったと思われる首をかじげ頬を片手で押えている地藏様も三体ある。人々は虫歯地藏、またはひいらぎの地藏さんとも呼び、虫歯で病む時ひいらぎの葉で地藏さんの頬をさすり祈るとよいとされ、なおるとくろもじの木を削った二十センチほどの揚子を編んで涎かけをつくり、首から下げてお礼詣りをしたと伝えられている。

上組道祖神。字古道の旧みのぶ路の傍にあったが、昭和の初め約百五十メートル西の熊野神社に移され旧状に復元された。百八十一センチ四方、高さ百二十センチの台上に石祠が祀られている。文政十三年五月、当氏子の刻名あり。上組で祀る。



中島道祖神（下組）

下組道祖神。字古道みのぶ路の道沿い。高さ六十センチの石祠。下組で祀る。大正十三年七月二十一日下組中の刻銘あり。

興禅寺。曹洞宗。本尊は勢至菩薩。慶長四年の創始という。甲府市川大門線沿いにある。

仏乗寺。日蓮宗。本尊は十界曼荼羅。もと浄土宗で慶長年間の改宗という。門前には題目塔（南無妙法蓮華経、身延山直末一極山仏乗寺、元禄十一寅天七月十三日。五百遠忌碑（南無妙法蓮華経法界奉書写妙経一石一部、成就、五百遠忌碑）享保十九年<sup>甲</sup>寅 禾四月八日などがあ

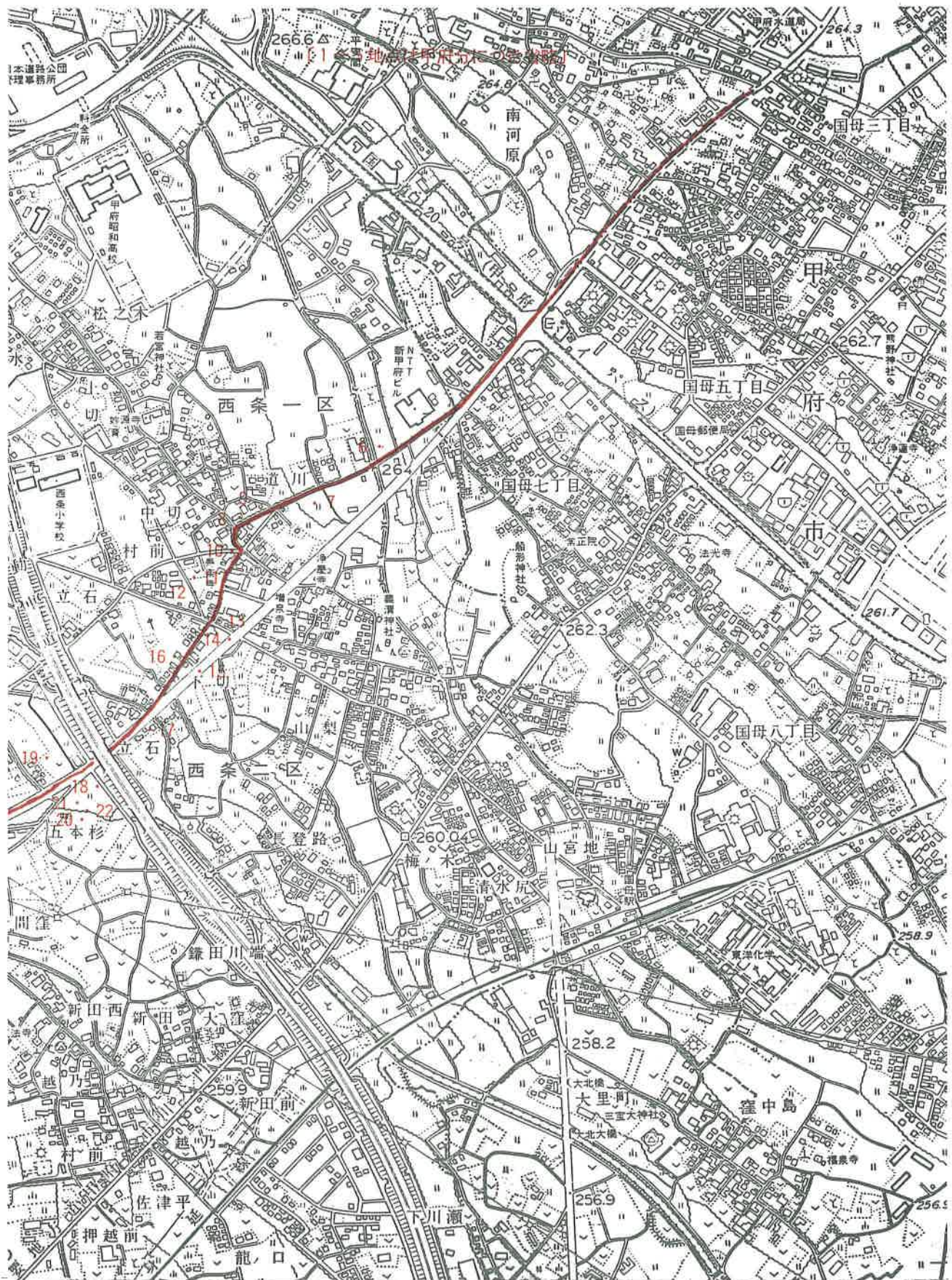
る。横大道の棹地藏。大木の下にある。石幢の幢身と思われ六角形をしているが、地元では棹地藏と呼んでいる。みのぶ路はこの前で大きく右折して上河東へ向かっている。

## 二六、上河東みのぶ道

〈常永地区〉

参考資料古地図。上河東村全図天明二年、文政三年、天保十四年、明治二年、以上四枚の古地図に明瞭に記されている。古地図による名称は甲府往還、又は甲府より駿州までの往来などと記されている。

上河東区を北より南に流れる、鉄橋のある大きい川を前川と記されている。近年になって圃場整備が実施され護岸工事も施行されたその時に東花輪川などと新しい名称がつけられているが、昔から前川、又





は間川などと称されて今日に及んだ。

その前川の支流が常永駅のホームの下を北から南に玉穂町に流れている。この支流を河東中島との境界として西に進み、常永駅前を身延線の線路の南側に沿って前川の鉄橋の南側を並行して越えて、身延線の線路を横断して北側に出て常永団地の方向に進み、ファミリコマーの西の上河東西の境界を流れる遠藤川までが上河東分として、その西河西分を西に進み、田富町を南下するものと思考される。

昔日のみのぶ道は、前川の鉄橋の下手に人が通れるぐらいの木橋が架してあったのを、時の土木がコンクリートの車も通れる橋に前川の川砂をあげて架け直した。その後町で架け直しをしたが、昭和六三年の書は巾六メートルという立派な永久橋となった。駅前のみぶ道も広い道巾となり、全部舗装されて昔をしのぶ由もない。このみのぶ道も私達の子供の頃は夢想だにできなかった道と変遷した。この現実を眺め、急激な発展をした時の推移の程を感じざるを得ない。

## 二七、常永駅

みのぶ道に隣接する身延線常永駅について。

昭和町内に全敷地がある常永駅。身延線は昭和三年三月三十一日、甲府―市川間の開通により全線開通となる。その日は雨だった。

富士―甲府間八十八・一キロメートル、運賃二円八十八銭、常永―

甲府間十五銭の日本一高い運賃だった。開通に至るまでの種々の案件処理のための書類で保存されているもの。

一、地主会開催通知書。昭和二年七月八日妙福寺。

二、地主会議事録。

三、土地売買協定書。特等一反八百五十円、田畑一等一反八百円、一坪二円六十七銭替。

四、小作者同情金明細書。地主は小作人に売却代金の二割を支払う事。

五、停留所敷地寄付の件に関する村議会議決書

昭和二年六月十五日

西条村外一ヶ村組合長 野呂瀬潔策

六、耕作者に対する補償料の明細

七、耕作者の受領誌

昭和五十三年三月三十日、昭和町主催身延線全線開通五十周年記念行事施行さる。用地売渡しの経過その他につき資料に基づき報告。引き続き町の木乙女椿を記念植樹す。

身延線の全線開通により、富士川舟運が水路担い三百二十年の役目を果たし、昭和三年舟運の幕がおりた。もともと富士川の舟運は、慶長十二年（一六〇七）甲斐・駿河・信濃の三国の経済文化の交流のため、徳川家康の命令で京都の水路開さく事業家角倉了以（すみのくりょうい）が富士川の水路を開さくする事になって、火薬を使って岩を砕き、鵜沢―岩淵間を開さくした。

身延線の用地買収に際し、小作者に同情金又は涙金として地主より

売上代金の二割の金が渡された。これが耕作権利金の初まりで、次第に小作者の権利が認められ、売渡金の五分五分、もっと進んで四分六分と逆転した事などを聞く。

## 二六、 妙福寺鰐口と源加豪族

昭和町唯一の県指定文化財鰐口を蔵す妙福寺と加藤源加豪族について。

みのぶ道の北に位置している妙福寺と加藤源加に関し古文書がある。古文書は和紙五枚を綴ってできており、その表紙に、

文化三年 巨摩郡上河東村  
境内古跡書上帖  
寅四月 日 常住山妙福寺

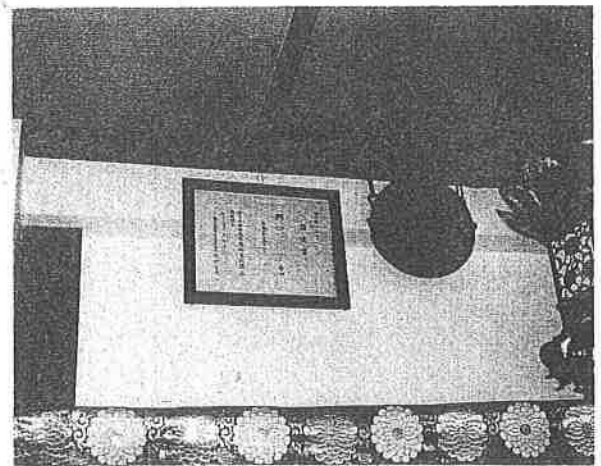
甲州身延山末 巨摩郡上河東村

日蓮宗 常住山妙福寺

往古真言宗海蔵寺と申候延慶三庚戌年住僧

當明法院身延山二世日向上人の門弟と相成改宗仕候名を常住院日妙と改め寺を常住山妙福寺と改め申候

當寺前に加藤源加の住所跡として申傳候屋敷有之候に今一村のもの



鰐口 (妙福寺)

源加屋敷と申候

四方に大堀石垣

等有之候処五十九

年以前、寛延元 戊

辰年六月大満水の

砌釜無川切れ田畑

悉く流出仕候砌砂

利悉く押埋夫から

堀も狭く相成候右

源加何れの頃の人

か古き書物等も無

く委細の儀者存不  
申候得共源嘉の石  
碑として寺内に罷在  
候

昔何れの頃の乱

に候や蜂起の人々

斧鋏にて悉く客殿

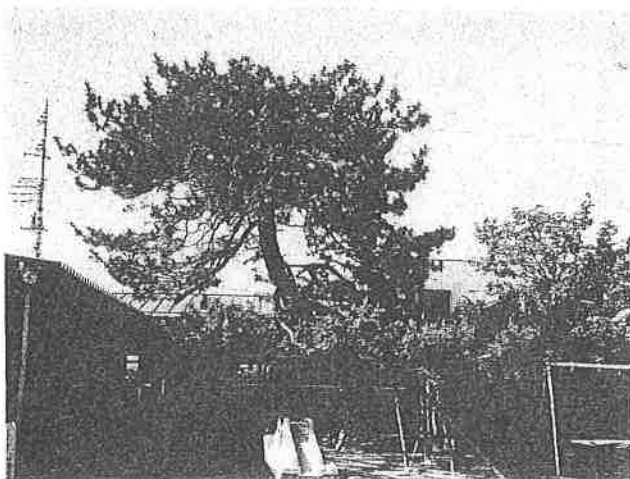
ほか切破と致候処

程々奇異の事あり

き群衆の人々も立

去候由只今に客殿

柱悉くに斧鋏の切



老松 (妙福寺)



目在之候其砌り捨候鱧口とて

甲州巨摩郡河内下山郷新長谷寺公甲

奉寄附鱧口也

天狗沢

于時天文二年乙未春正月吉日 大工

大檀那源信友 大願主泉長坊

一に天文法乱の砌と申一に信長一乱の砌と申候皆申傳にて慥成正

抛書物等も無之候

御墨印

## 二九、熊野神社

昔の神輿を町の資料館（公民館裏のプレハブの建物）に保管を依頼している 上河東の熊野神社について。

この神社の境内の広さは四百六十五坪。三人の神様、伊弉册命（いざなぎの命）、速玉男命（はやたまおの命）、事解男命（ことわかおの命）が祀っております。

今から六百余年前、甲斐源氏の臣、加藤兵エ景正の産神（うぶすな神）、屋敷神で、代々住んでいたところで、この辺一帯を加藤の郷と称し、上河東、下河東、町田、井の口、河東中島、飯喰、築地、玉川など八ヶ村の総元締め神社で、祭りの時はお神輿をねって八ヶ村を回り、下河東の神社で昼めしを食べ回りながら帰村した。

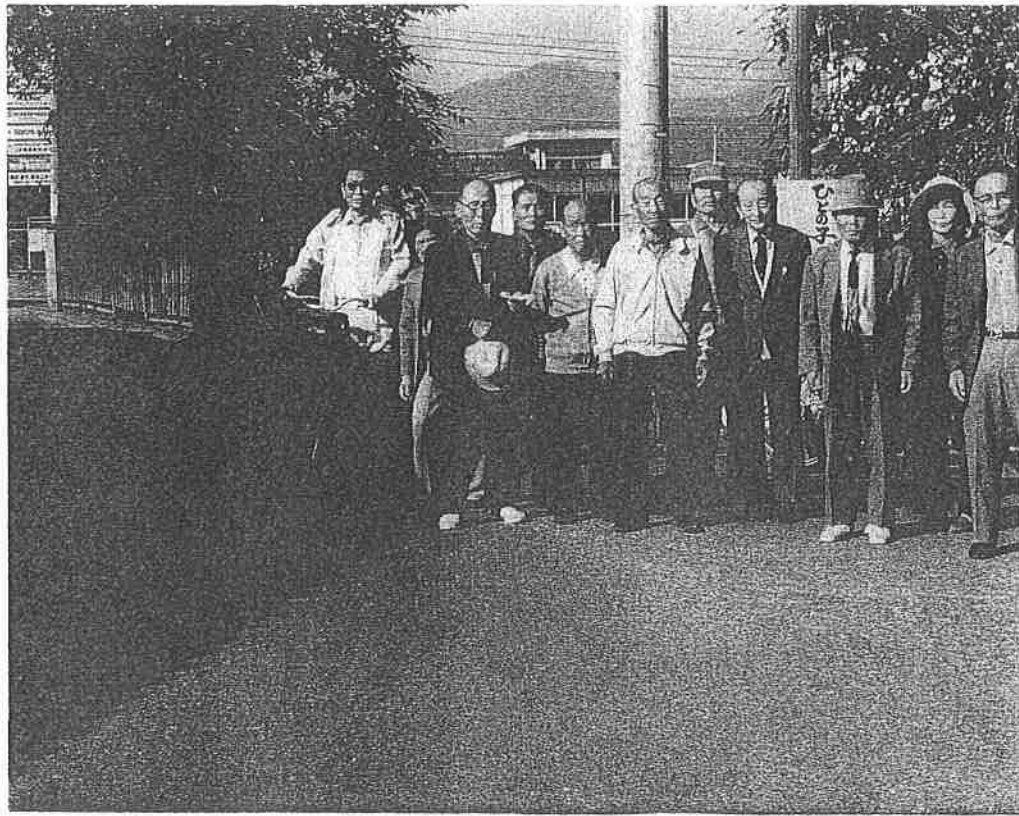


熊野神社

町にも民族資料館が建設されるならば陳列をされ、幾久しく町民に過ぎし日の歴史に接する事ができる事を期待する。

昔日は鬱蒼たる古木のため、昼なお暗いという荘厳の森だったが、昭和三十四年の台風のため数百年を経た杉の御神木も根こぎとなって倒伏し、他の大木も折れたり倒れたりした。その後補植をして今日の若木の森となる。

加藤の郷八ヶ村については、昔から拝殿にあった寄付板に文久二年拝殿修理の時に各部落から寄付金をしたのでその部落名が記してありました。昭和四十九年春拝殿改築の折、伝統と歴史のある神輿を町に保管を依頼して今日に至りましたが、何時の日か昭和



みのぶ道を踏査する ことぶきマスター部員

## 編集後記

みのぶ道が発展的解消とは言いながら大部分が拡幅舗装され、原型を留める部分は残り僅かになりました。今にして、みのぶ道の功績と沿道の文化財とを私達の手で書き残して置かないと、永遠に忘れられることを憂え、昭和町ことぶきマスターは、調査研究して一冊子として出版する次第です。

浅学非才のものの仕事なので、不充分の点や或は誤りがあるかとも思われますが、読者諸賢のご教示をお願いして止みません。

編集出版にあたり、温かいご指導ご協力を賜りました町長を初め、当事者の方々のご厚意に深く感謝の意を表します。

昭和六十三年八月

### 編集委員

井 口 伝  
柳 沢 八十一  
武 井 幸 夫

---

昭和町歴史の道調査報告書 創刊号

## みのぶ道 (昭和町)

昭和63年8月25日印刷

昭和63年8月30日発行

発行 昭和町ことぶきマスター協議会

編集 昭和町ことぶきマスター協議会

印刷 (有)酒井プリント社

---